## 神田ムク入道遺跡

- 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2005.3

高知市教育委員会

## 神田ムク入道遺跡

- 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2005.3

高知市教育委員会



1. 遺構完堀状況



2. SD2遺物出土状況

神田地区は高知市の西部に位置しており、北側の鴨田地区や西側の朝倉地区などとともに、市内でも早くから鏡川の沖積作用による陸地化が進み、人々の居住が広がった地域で、奈良時代の文献にもすでに神田地区を示すと考えられる地名が登場しています。それ以前の先史・原始時代においても遺跡が形成されており、朝倉地区に所在する柳田遺跡では平成4年に、鴨田地区に所在する鴨部遺跡では平成13年にそれぞれ発掘調査が行われ、縄文時代には人間が居住していたことがわかっており、また、周辺の山沿いには古墳も点在しています。

今回調査を行った神田ムク入道遺跡は、上に述べたような先史・原始時代の遺跡ではなく、中世前半の鎌倉時代頃を中心時期とする遺跡です。高知市内で、この時代の遺跡について本格的な発掘調査が行われたのは、この遺跡が初めてです。調査面積は約300㎡と小規模でしたが、発掘調査では井戸跡や溝跡をはじめとする、この時代の多くの遺構が検出され、また、当時の人々が使用した土器や陶磁器などの遺物も多く出土しました。この報告書が文献資料の比較的乏しいこの時期の高知市、とりわけ神田地区の歴史についての研究や理解を深め、文化財保護の取り組みを更に深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に関わられた方々にお礼を申し上げるとともに、関係各機関のご理解とご協力に感謝いたします。

平成17年3月 高知市教育委員会

#### 例 言

- 1. 本報告書は高知県高知市神田に所在する「神田ムク入道遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力をうけ、高知市教育委員会を主体として、 1995年9月11日から10月14日まで行った。調査面積は約323平米である。また、重機掘削については共運工業有限会社の協力を得た。
- 3. 発掘調査においては調査対象地の形状に合わせた任意座標を設定し使用した。
- 4. 整理作業は現場終了後2005年2月まで行った。遺物及び諸記録は高知市教育委員会で保管している。遺物の注記は95-16-KMである(試掘調査2の注記は95-25-KM)。
- 5. 現地調査においては、多くの方々の協力をえて調査を進めることができた。記して感謝したい。
- 6. 整理作業においては、下記の方々の協力を得た。(順不同・敬称略)

大賀幸子、樫尾洋子、松本安紀彦、森岡亜衣子

- 7. 本書の編集は田上浩が行った。執筆は、第1章第2節を梶原瑞司が、それ以外を田上が分担した。また、編集に際して岩﨑佐枝、大賀幸子の協力を得た。また、遺物写真撮影は梶原、遺物観察表の作成は田上・梶原が共同で行った。
- 8. 本書内の遺物実測図については縮尺を1/3で統一した。また、遺構図についてはSE1のものを除き1/100に統一した。
- 9. 本書内での中世の酸化焔焼成の素焼き土器については回転台土師器や(須恵系)土師質土器等の名称は使用せず、単に土師器の名称を用いた。 須恵質焼成の遺物についても古墳時代~古代、中世ともに単に須恵器の名称を用いた。
- 10. 出土渡来銭のX線写真については、高知県工業技術センターの協力を得た。記して感謝したい。
- 11. 発掘調査及び報告書作成にあたり、高知県教育委員会及び高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

## 本文目次

#### 本文目次

第1章	調査に当	至る経緯と経過及び周囲の環境	
	第1節	調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 1
	第2節	遺跡の立地及び付近の遺跡	
		(1)立地環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 1
		(2)歷史的環境 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 2
	第3節	調査の方法	
		(1)試掘調査1 (今時対象地) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		(2)試掘調査2 (今時対象地の北隣) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		(3)本発掘調査 ·····	• 9
第2章	調査の原	<b>戊果</b>	
	第1節	基本層序 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 13
	第2節	検出遺構と出土遺物	
		(1)井戸跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 13
		(2)掘立柱建物跡 ·····	• 14
		(3)柵列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 17
		(4)土坑 ······	
		(5)ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 21
		(6)溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 26
	第3節	包含層出土遺物	
		(1)2層出土及び表採遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		(2)3層出土遺物 ······	• 33
	第4節	試掘調査出土遺物	
		(1)試掘調査1	
		(2)試掘調査2 ·····	• 36
第3章	まとめ		
	第1節	弥生時代 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	-
	第2節	古墳時代から古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 51
	第3節	中世	
		(1)遺物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 5]
		(2)遺構	
	第4節	近世以降 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	. 57
	第5節	終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 57

## 図版目次

図 1	周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 2	試掘調査1試掘坑配置図及び遺構検出状況図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 3	試掘調査1試掘坑配置図及び遺構検出状況図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
図 4	本調査検出遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
図 5	東壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 6	SE1出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 7	SE1平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 8	SB1平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図 9	SB2平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図10	SB3平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図11	SB4平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
図12	SB5平面図・断面図	
図13	SB6平面図・断面図	
図14	SB7平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
図15	SB8平面図・断面図	
図16	SB9平面図・断面図	
図17	SB10平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
図18	SB11平面図・断面図	
図19	SA1平面図・断面図	
図20	SB・SA出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図21	SA2平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
図22	SA3平面図・断面図	
図23	SK1平面図・断面図	
図24	S K 2 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
図25	SK3平面図・断面図	
図26	S K 4 平面図・断面図	
図27	SK出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図28	P 1 ~ P 2 2 出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図29	P 2 3 ~ P 3 0 出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	25
図30	SD平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図31		
図32	SD2南半部出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図33	SD2北半部出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
図34	SD3出土遺物実測図及び拓影	
図35	2層出土及び表採遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
図36	3層出土土師器実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図37	3層出土遺物(土師器以外)実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
図38	試掘調査1出土遺物実測図及び拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図39	試掘調査2出土遺物実測図及び拓影1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	37
図40	試掘調査 2 出土遺物実測図及び拓影 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
十師界	景坏,小川注量分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	55

## 表 目 次

周辺の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	_
ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 22
遺物観察表 1 (1~23)	• 39
遺物観察表 2 (24~46) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 40
遺物観察表 3 (47~69) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 41
遺物観察表 4 (70~91) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 42
遺物観察表 5 (92~111) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表 6 (112~136) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表 7 (137~158) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表 8 (159~180) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表 9 (181~203) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表10(204~224) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
遺物観察表11(225~245) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
遺物観察表12(246~264) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
土師器小皿・坏集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 54
写真図版目次	
<b>子</b>	
巻頭カラー · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	失頭
1. 遺構完掘状況	235
3 CD 3 海肿山土作归	
5. 3 D 2 通初山工水化 写真図版 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	· 61
1. 試掘1及び本調査対象地全景(南から)	
2. 試掘2調査対象地全景(南から)	
写真図版 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 62
3. 溝跡完掘状況 (南から)	
4. SE1完掘状況 (北から)	
写真図版 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 63
5. 遺物出土状況	
6. 遺物出土状況	
写真図版 4 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 64
7. 遺物出土状況	
8. 遺物出土状況	
写真図版 5 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 65
9. 遺物出土状況	
10. 遺物出土状況	
写真図版 6 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• 66
11. 遺物出土状況	
12. 遺物出土状況(試掘 2) 写真図版 7 出土遺物 1 ( 1 ~24) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	

写真図版 8	出土遺物 2	(25~47)	68
写真図版 9	出土遺物 3	(48~71)	69
写真図版10	出土遺物 4	(72~93)	70
写真図版11	出土遺物 5	(94~117)	71
写真図版12	出土遺物 6	(118~140)	72
写真図版13	出土遺物 7	(141~164)	73
		(165~188)	
写真図版15	出土遺物 9	(189~212)	75
		(213~232, 234)	
写真図版17	出土遺物11	(233、235~249)	77
写真図版18	出土土器12	(250~264、渡来銭)	78

## 神田ムク入道遺跡

- 宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

#### 第1章 調査に至る経緯と経過及び周囲の環境

#### 第1節 調査に至る経過

神田ムク入道遺跡は高知市神田地区に所在する遺跡で、中世の遺跡として周知されている。

1995(平成7)年5月、周知の埋蔵文化財包蔵地(神田ムク入道遺跡)の範囲内において「埋蔵文化財の所在の有無」についての照会が、続いて7月に「埋蔵文化財発掘の届出」が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対して提出された。これを受けて市教育委員会では8月21日~25日にかけて試掘調査を行った。その結果、設定した4箇所の試掘坑全てにおいて土器・陶磁器等多くの遺物が出土するとともに遺構も確認された。

試掘調査の結果を受けて地権者・県教育委員会・市教育委員会の三者で協議が行われた。当該地は、造成後に事務所用地として賃貸の予定であることから、当該地のうち駐車場予定地部分を除いた建物予定地部分の約300平米について緊急の発掘調査を行うということで意見の一致をみた。発掘調査は以下の体制で行われた。

調 査 主 体 高知市教育委員会

事 務 全 般 依光桃子(高知市教育委員会社会教育課主事)

調 査 協 力 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

現 地 調 査 田上浩・田坂京子(埋蔵文化財センター主任調査員)

現地調査期間 1995(平成7)年9月11日~10月14日

#### 第2節 遺跡の立地及び付近の遺跡

#### (1)立地環境

神田ムク入道遺跡の立地する高知市の平野部は、北部と南部を東西に延びる小起伏山系によって挟まれた地溝状の盆地である。この平野の基盤地質は秩父累帯中帯と南帯に属しており、その上は沖積層により広く覆われている。この平野の堆積には、秩父累帯北帯に源を発する鏡川が多くの役割を担いつつ、さらに周囲の山々より流れ込む久万川、神田川、吉野川らの小河川がそれを部分的に補ったものとみられる。この進行について参考となる資料に、約6,300年前に降下した九州南西沖の鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰層がある。この層が、鏡川沖積扇頂部に近い高知市の「朝倉付近で(海抜)0m付近、上町付近で-10m以上、最深部は(浦戸湾)深奥部の弘化台付近で-30m以上」とされており、鏡川沖積扇状地の基盤地形が急な傾斜で扇端部に至る状態を窺うことができる。

鏡川は多くの支流を集め、高知市鏡・川口付近より水量を増して南流後、蛇行しつつ深い谷を刻

み河岸段丘を発達させるが、同市尾立辺りから川幅を広げ扇状地を形成する。当遺跡周辺にもこの扇状地は広がっているが、典型的な扇状にはならず、東側により長く発達している。鏡川は現在堤防により流れを固定されているが、かつては低湿地を何度も河道を変えつつ様々に流路を形成していたものと思われ、神田地区周辺には蛇行河道跡らしい地形が幾筋ものこっている。

当遺跡は、市街地南部を東西に連なる宇津野山・烏帽子山・柏尾山を含む、鷲尾山脈の北側丘陵 先端付近の微高地上に立地している。その北方には鏡川の一支流神田川が東流しているが、その河 道は、水源の高知市西部の小丘陵、針木の谷を発した後、現在の高知市朝倉、鴨部、神田地区を鏡 川と同様一定せずに流れ、度々氾濫を繰り返したものとみられている。

#### (2)歷史的環境

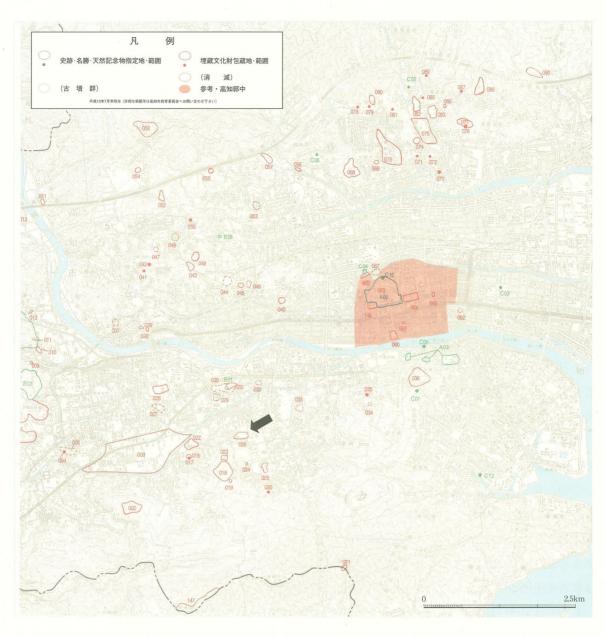
高知市内の縄文時代の遺跡としては、浦戸湾を望む小高い段丘上に立地するチドノ遺跡の地下5mから前期初頭の羽島下層式土器の深鉢が出土しており、また北部山系に属する正蓮寺不動堂前遺跡からは、中期初頭の船元I式土器や礫石錘、後・晩期の条痕文土器や磨研土器が発見されているが、他にこれを遡る遺跡は未確認である。

神田ムク入道遺跡周辺の平野部には、神田川を隔てて約1km西に柳田遺跡があり、縄文時代後期の包含層から有文深鉢や外面条痕深鉢及びサヌカイトの大型剥片が出土している。また、晩期の包含層からは深鉢、浅鉢のほか磨製石斧、叩石、勾玉といった石器も出土している。柳田遺跡ではこの他にも弥生から古墳時代に至る土坑や流路の遺構、大量の土器をはじめ、木製の農具、建築材、琴柱、梯子さらに馬骨も発見されており、高知市内最古・最大級の遺跡として注目される。さらに当遺跡の約0.6km北の鴨部遺跡でも、縄文時代晩期から弥生後期までの土器・石器が出土し、市内平野部では初の竪穴式住居跡も検出されている。

古墳は近くの独立丘陵や山腹に散在しており、いずれも後期に属する舟岡山古墳、高座古墳、ウグルス山古墳などである。古代の遺跡としては、先にふれた鴨部遺跡で検出された掘立柱建物跡、柵列、溝跡に集落の存在が推定されるほか、この約750m西方の加治屋敷遺跡からは、須恵器高杯脚部が表採されている。当地には延喜式内社の郡頭神社があり、これを祀る勢力の存在も想定される。また、鏡川右岸の朝倉、神田地区一帯には良好な条里地割りの遺存が指摘されており、律令制下の開発も広く行われたとみられる。

『和名類聚鈔』によると神田地区は「土佐郡」に属し、「神戸」郷にあたると考えられる。『続日本紀』神護慶雲二(768)年条には「土左国土左郡人神依田公名代等 #\*一人賜姓賀茂」の記事があり、隣接する「鴨部」郷の地名からも、古代豪族「賀茂氏」との強い関わりが想定される。『東大寺東南院文書』によると、鴨部郷は天平勝宝四(752)年『造寺司牒』の封戸施入記事で「土左郡鴨部郷五十戸」とあり、東大寺の封戸として中央との関わりを有していた。後に、この「五十戸」は香美郡に移っており、久安四(1148)年に「土左国百烟 同代米二百六十四石六斗二升以色代如形辨之」とあるのは鴨部郷ではないものの、平安時代末期まで長きにわたり土左に東大寺封戸が存在したことは注目される。

中世の神田地区は、土佐一国の検地の結果を記した『長宗我部地検帳』によると、表題に「土佐



上掲の地図は、国土地理院発行の 1/25000 地形図に基づく『高知市遺跡地図』(平 13 四複第 82 号)の一部を 1/50000 の稲尺に複製。(使用地形図 いの(高知 11 号-2)こうち(高知 7 号-4)]

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
		()内は消滅				()内は消滅	
A02	高知城跡	城館跡	近世	023	シルタニ遺跡	散布地	弥生・平安
B02	朝倉城跡	城館跡	中世	024	高神遺跡	散布地	古墳・平安
002	恵美城跡	城館跡	中世	025	神田遺跡	散布地	弥生~中世
004	ウグルス山古墳	(古墳)	古墳	026	神田ムク入道遺跡	集落跡	弥生~近世
005	糊来巢城跡	(城館跡)	中世	027	鴨部城跡	(城館跡)	中世
008	柳田遺跡	散布地	縄文~中世	028	加治屋敷遺跡	散布地	古代~中世
010	朝倉神社	神社境内地	古代~	029	鴨部遺跡	散布地	縄文~近世
011	赤鬼山遺跡	散布地	弥生	030	神田旧城跡	(城館跡)	中世
016	舟岡山遺跡	散布地	弥生	032	石立城跡	(城館跡)	中世
017	舟岡山古墳	(古墳)	古墳	033	久寿崎ノ丸遺跡	散布地	弥生~中世
018	神田南城跡	城館跡	中世	034	小石木町遺跡	散布地	弥生
019	ケジカ端遺跡	散布地	弥生	035	小石木山古墳	古墳	古墳
020	高座古墳	古墳	古墳	036	潮江城跡	城館跡	中世
021	鷲尾城跡	城館跡	中世	037	杓田城跡	(城館跡)	中世
022	鷺泊橋付近遺跡	散布地	弥生~中世	147	柏尾山城跡	城館跡	中世

高知市発行の高知広域都市圏図(1/2500)を1/5000に縮小 0 100m

図1 周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図

郡神田之庄地検帳」〔天正拾六(1588)年成立〕とあり、領主は不明ながらそれ以前に荘園化されていたことを窺わせる。併せて『地検帳』の中には「マトコロヤシキ」(政所屋敷)の小字が記され、荘園支配者の居住地を思わせることもそれを裏付けている。また検地高を記した際の土地の所有者をみると、大半は「地頭分」で他は「八名分」とあり長宗我部氏家臣の給地で、両者は明白に二分されている。これを荘園制下の下地中分の名残りとみて、「八名分」が領家分にあたるとの見方もある(『高知市史 上巻』)。検地面積は神田庄全体で八十七町七段余となっている。宅地化の進んだ今、ここで当遺跡の所在地を『地検帳』に記載された土地と厳密に照合することは難しいが、当地及びその周辺とみられる地名をあげていくと、先にふれた「マトコロヤシキ」をはじめ、「道場ヤシキ」「別当ヤシキ」「土ゐヤシキ」「シウケンヤシキ」など在地有力者の居宅を思わせるものが遺り、重要な地域であったことが推察される。

この『地検帳』を遡る時代に当地に住んだ有力者やその支配の様子を具体的に知ることは、資料的な制約から難しい。中世城跡では北東約750mに石立城跡、北方約600mに神田旧城跡、南西約500mに神田南城跡、西北約1.2kmに鴨部城跡がある。これらに囲まれる地勢から、戦国時代に『土佐物語』など軍記物に語られるような激しい合戦場となったことも頷ける。城主も変遷を遂げたようで確実なことは不明である。ただ鏡川を隔てて約2.3km北西の杓田の地には、この地域を広く領した有力地頭・大黒氏が居り、朝倉・鴨部・神田といった高知市西部にも少なからぬ勢力を及ぼしていたことが推測される。『佐伯文書』(『土佐国蠧簡集拾遺』一所引)によると、南北朝期に大黒氏は北朝方に属し、大高坂松王丸ら南朝方と、今の高知城の場所にあたる大高坂城周辺を主戦場に戦闘を繰り返していたらしい。最終的に勝利し、引き続き有力守護・細川氏との関係を維持しつつ、当地を支配していたものと考えられる。

その他当地に勢力を及ぼしていたらしい有力土豪としては、仁淀川を隔てた高岡郡東部・蓮池を本拠地とした大平氏がある。「土左郡鴨部社棟札」(『土佐国蠧簡集』巻四所引)には「鴨部御社大檀那大平山城守国雄永正元年甲子九月十日」の文字があった。この史料から大平氏の支配の様子までは導きだせないが、永正元(1504)年頃に一定の勢力を当地に有していたことは認められよう。

しかし大永七(1527)年には「朝倉庄池内天神社」棟札(『土佐国蠧簡集拾遺』巻三所引)に、後に本山氏となる「八木実茂」の棟上げが記されており、この時期には四国山地の懐・嶺北地方から台頭してきた強力な本山氏の勢力が、高知市の平野部に拡大しつつあったことがみてとれる。そして後には土佐随一の規模をもつ朝倉城を築き、浦戸湾以西の土佐中央部に広く支配を及ぼしている。よってこの城から3km圏にある在来の神田の土豪たちは戦って敗れたか、配下に属し、何とか生き延びる道を選んだものとみられる。

とはいえ本山氏の支配も長くは続かず、永禄三(1560)年には、長岡郡岡豊の地より興隆した長宗 我部氏との、土佐中央部の覇権をかけての戦いが始まり、神田の地はその主戦場となった。その結 果、長宗我部氏が勝利し、本山方に属していた神田の在地土豪達は再び退転を余儀なくされ、多く は滅び去ったようである。そして本山方に属し敗れた者たちの土地は接収され、『地検帳』にみる 長宗我部家臣の所領と化したものとみられる。

このような激しい変転の中、先にあげた大黒氏は強かに生き残った一族である。元来、大黒氏は

長宗我部氏の古い一族との伝承があり、同じ先祖の「秦氏」を名乗ったこともある(『南路志』巻十六所引「杓田村本宮大明神棟札」)。大黒氏は一時、本山氏の支配を受けながらも、長宗我部氏の挙兵に伴い参軍し、本山方と戦っている(『土佐国蠧簡集』巻九所引「大黒弾正忠宛 長宗我部元親書状」)。その英断と戦功により『地検帳』に記載されるような本貫の杓田をはじめ、鴨部・大高坂などの所領も無事安堵されている。これに伴い長宗我部氏の土佐平定は大いに進展するが、同時に自らの家臣を占領地に配しての在地有力者の牽制も忘れてはいない。新たに入城した神田城主の細川宗桃、石立城主の吉田三郎左衛門などの厳しい監視下に、大黒氏や神田の在地武士たちも置かれたのであった。

長宗我部氏は土佐一国の統一後、四国全土をほぼ平定しているが、専門化された秀吉軍の来襲にはあっけなく敗れ去り、土佐のみを安堵された。そしてこの後、秀吉の様々な要請に応えつつ新たな時代の領国経営に力を注ぐ必要があった。その一つが検地であり、また天正十六(1588)年と伝えられる、岡豊城から大高坂城への移転とそれに伴う本格的な城下町建設であった。これは兵農分離のための家臣団の集住を目的としており、神田からは「吉野殿」と称される有力者が移住したことを『大高坂郷地検帳』が伝えている。また新たな都市の建設に必要な商業地・市場町の移転もすすめており、「朝倉市」が石立村に広い敷地を構え開かれている。しかし大高坂城下町建設は不調に終わり、僅か二年余りで中断され、太平洋に臨む浦戸への再移転となる。治水の困難さが要因とはされるが、やはり在地有力者たちの強制移住や城下町建設への多大な負担から予想以上の抵抗にあい、困難の打開が図られた結果ではなかろうか。そして当面の中心地として、交易に有利でまた秀吉からの水軍派遣要請にも迅速に応じられる浦戸を選択したものと考えられよう。結局長宗我部氏はこの地で終焉を迎え、新たな支配者・山内氏の入国となる。

このような時代の流れのなか、中世の土佐で注目すべきは、海上交通の発達とそれに伴う経済の進展である。15世紀に始まる勘合貿易のルートは、当初兵庫から瀬戸内海を経由して関門海峡から東シナ海を渡り、明に向かっていた。しかし応仁の乱以降、貿易船を出していた細川氏が、瀬戸内海西部を制する大内氏と対立するようになると、新たな海路の開拓に迫られた。その結果、細川氏は自らの勢力圏である摂津から四国東部を経て、土佐湾に至り、浦戸から日向の油津を通り、九州南部から東シナ海を渡るルートを利用するようになった。この結果、大陸の産物を扱う堺商人との取引も増え、土佐の人々も少なからず関与し回船商人として各地に渡ったと推測される。その傍証に、日本最古の海事法として著名な『廻船大法』の奥書にある「土佐浦戸篠原孫左衛門」の名があげられる。兵庫や薩摩坊津の商人と共にその制定者として記された事実は、貞応二(1223)年という『廻船大法』の成立年代や連名者の実在性に疑問は残るとしても、条文が極めて具体性に富むことから全くの虚構とは断じきれない。やはり何らかの歴史的事実や伝承に基づき、遅くとも近世初頭には中世以来の海の慣習法をまとめて成文化されたとみられ、かつて浦戸商人の果した重要な役割を垣間見せているようである。なお神田地区は神田川・鏡川を利用して浦戸湾に出ると、浦戸の外港には至便であり、神田の人々もその通商圏にあったものとみられる。そのことは当遺跡から少なからず出土する中国の同安窯、龍泉窯からの輸入陶磁器からも窺えるであろう。

山内氏の入国後、新たな政治拠点となった大高坂では新しい城郭の建設が行われ、神田からも石

材が運ばれた。そして慶長八(1603)年新藩主・山内一豊の入城後、高知城下町は土佐藩の政治・経済の中心地として発展する。長宗我部氏を支えていた一領具足とよばれる在地の武士たちの多くは農民に戻り、藩の経済を支えることになる。またその一部は庄屋となり、あるいは郷士となって各地で一定の支配体制に組み入れられていった。

神田村は元禄の『地払帳』によると総地高は一千三四石余で、うち本田高八七八石余・新田高一五五石余である。本田は蔵入地が百六石余で、他は桐間将監ら22名の知行地であり、新田は貢物地七二石余、残りは久万彦兵衛及び1名の役地と三橋源五良他2名の領地となっている。寛保の『郷村帳』には家数一二九、人数六三八とある。なお当地から南西に道をとり標高231mの白土峠を越えると、中世には隆盛を誇った観正寺(観音正寺)跡を経て、吾南平野に至る古道が通じており、かつては城下町と豊かな農業地帯・現春野町とを結ぶ幹道となっていた。

#### 参考文献

『日本の地質8―四国地方』(日本の地質 四国地方編集委員会編 1991年)

『高知県の地名』(日本歴史地名大系40 平凡社 1983年)

『高知市史 上巻』(高知市史編纂委員会編 1958年)

『高知県史 古代中世編』(高知県編 1971年)

『高知県の歴史』(荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興 山川出版2001年)

大脇保彦「十佐の条里―その復元再考と補説」(『高知の研究 第2巻』 清文堂 1982年)

『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第17集(高知県埋蔵文化財センター 1994年)

『鴨部遺跡』高知市文化財調査報告書第23集(高知市教育委員会 2002年)

#### 第3節 調査の方法

神田ムク入道遺跡においては、本発掘調査には至らなかったものの、同じ年度に今時対象地の北 隣の土地においても試掘調査を行った。出土遺物は少ないが、今時対象地とは傾向の異なる遺物が 出土しているため、併せて報告する。

#### (1)試掘調査1(今時対象地)

試掘調査においては、 $3 m \times 4 m$ もしくは $5 m \times 5 m$ の大きさの試掘坑(テストピット= TP)を対象地の4箇所に設定して調査を行った。調査においては主に機械力を用いて掘削を行い、遺構を検出したところで人力に切り替えた。4 箇所の試掘坑のうち、TP-3 については本発掘調査対象地と重なっている。

#### (2)試掘調査2(今時対象地の北隣)

同年12月11日~15日に今時対象地の北隣の土地において、宅地開発に伴う事前調査として試掘調査を行った。調査にあたっては、 $3\times 3$  m~ $6\times 6$  mの試掘坑を対象地の4 隅と中央部に設定した。

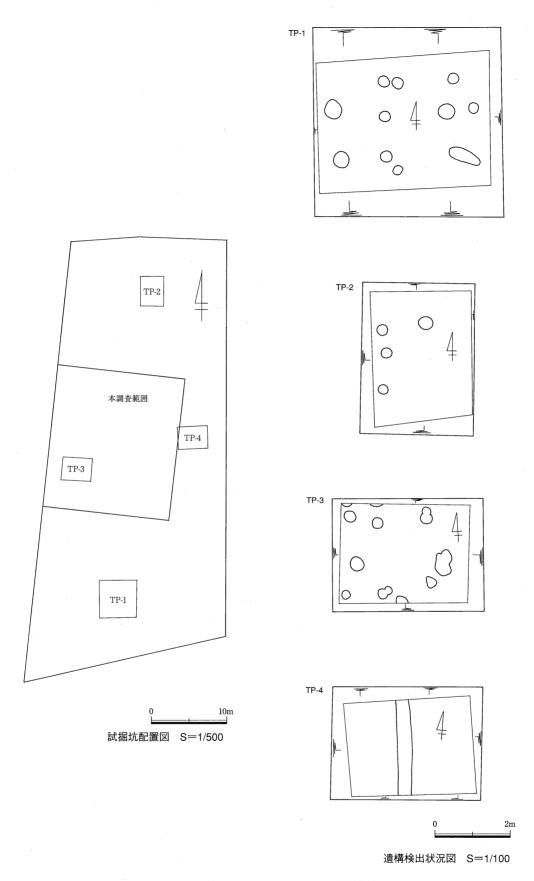
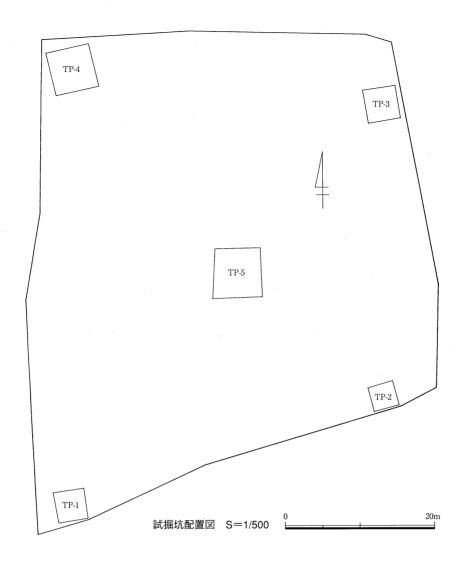


図 2 試掘調査 1 試掘坑配置図及び遺構検出状況図



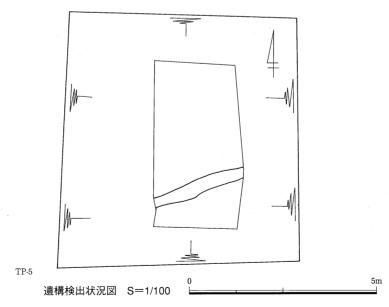


図3 試掘調査2試掘坑配置図及び遺構検出状況図

対象地の大部分にはすでに厚さ 2 m程度の盛土がされており、 4 隅のT P -1  $\sim$  T P -4 迄はもとの水田表土の露出している部分からの掘削であるため、場所によって試掘坑の大きさに差が出来ている。また、中央部のT P -5 については盛土の上からの掘削となっており、表面の広さに比べて実際に調査できた面積はかなり小さくなっている。

#### (3)本発掘調査

本調査については建物の予定地を対象にした関係で、形状がほぼ長方形であったため、その形状 に合わせて任意の座標を設定し、その座標に基づいて4m間隔のグリッドを設置して、遺構・遺物 の記録を行った。ただし、本報告書内では磁北に合わせた座標に変換して、平面図・文章等の記述・表記を行っている。

調査の手順については、基本的には遺構検出面までは機械力を利用して掘削した。その後、人力 を用いて遺構・包含層の掘削、遺物の取り上げ等を行った。

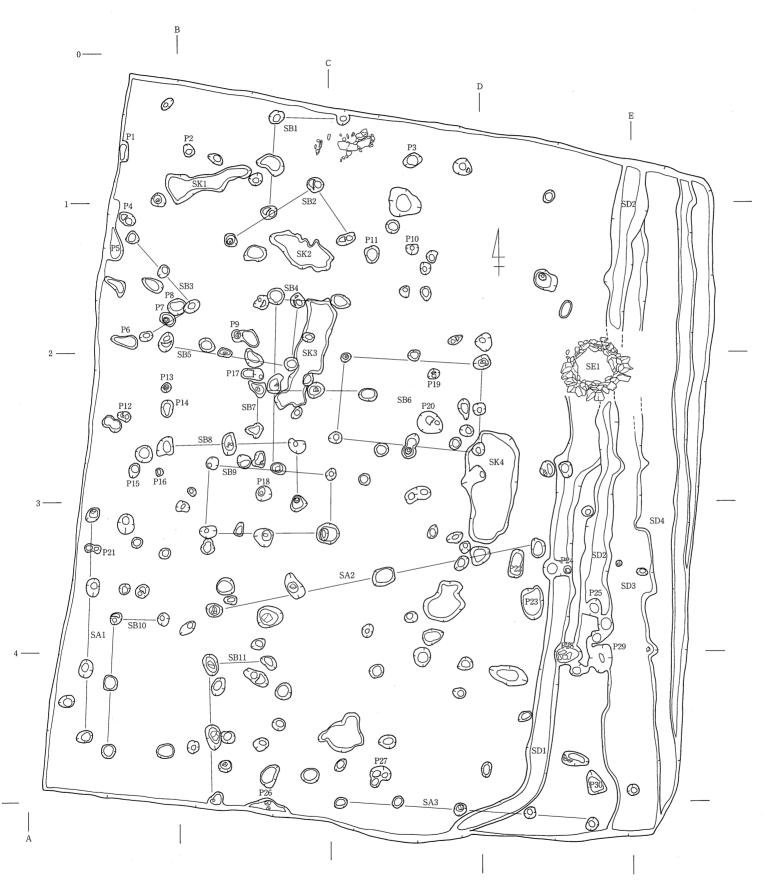


図 4 本調査検出遺構平面図(S=1/100)

### 第2章 調査の成果

#### 第1節 基本層序

対象地付近は浦戸湾にそそぐ鏡川の三角州の南辺部にあたり、亜円礫が多く混じり比較的よくしまった土層が主体をなしている。遺物包含層は、最上層の水田耕作土及び床土層がおわったすぐ下の層から始まっているため、最上部は後世の削平を受けている可能性が高い。遺物包含層は暗褐色粘質土であり亜円礫を比較的多く含み、シルト・砂を若干含む。

表土下0.5m程度より下層には、洪水礫層と見られる砂礫層が存在しており、試掘調査の際に最大で2.5mの深さまで掘削したが、同様の堆積が続いていた。

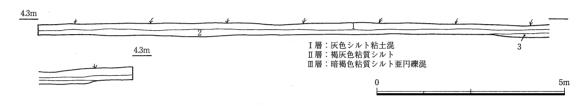


図 5 東壁土層断面図 (S=1/100)

#### 第2節 検出遺構と出土遺物

#### (1)井戸跡

-SE1-

調査対象地の北東 部で検出された井戸 跡である。検出面の 内径は約1.2m、底 面の内径は約0.8m、

深さ約1.1mを測る。

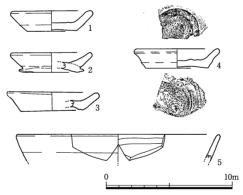


図 6 SE1出土遺物実測図及び拓影(S=1/3)

底面に木製(曲げ物)の井筒がおかれていた。井筒は土圧のためやや歪んでいたが、径 $0.4\sim0.5$ m、深さ0.3mである。井戸の周囲は割石積みであった。後述するSD2及びSD3を切って築成されていた。

出土遺物のうち図化したものは5点である。1~4は土師

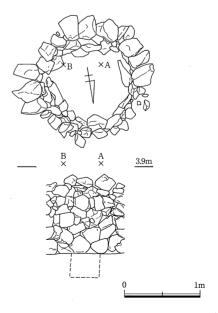


図7 SE1平面図・断面図(S=1/50)

器の小皿であり、底部は回転糸切り、しっかりとした底部から直線的な短い口縁が上外方に開き、端部は丸く収める。口径は6.1~6.9cmの範囲におさまり、やや小さめである。5は青磁碗の口縁部小片で、器壁は薄く、釉薬の厚みも薄い。端部内面に二条の界線を施す。

#### (2)掘立柱建物跡

合計で11棟の建物跡を検出した。全体的に規模は小さめである。

#### -SB1-

調査対象地の北端やや西よりで検出した梁間1間(1.8 m)・桁行2間(2.6m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.8m、桁行1.3mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN0°EWである。

図化した出土遺物は2点で、口径は8.4cmと大きいが、口縁の非常に短い土師器小皿(6)と、口径が12.9cmと、やや小さめの土師器坏(7)である。

#### - s B 2 -

調査対象地の北西部、SB1の南側で検出した梁間1間(1.7m)・桁行2間(2.8m)の建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行1.4mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN56°Eである。

図化した出土遺物は2点で、口径が7.6cmの土師器小皿(8)と、口径が14.5cmとやや大きめで微かな円盤状の高台を持ち、端反りの土師器坏(9)である。

#### - SB3 -

調査対象地の西端北より、SB2の西側で検出した梁間1間(1.6m)・桁行2間(2.4m)の南北棟建物である。 平均の柱間寸法は梁間1.6m、桁行1.2mを測る。建物の 桁行方向の磁北からの偏角はN36°Wである。

図化した出土遺物は2点で、口径が7.7cmの土師器小

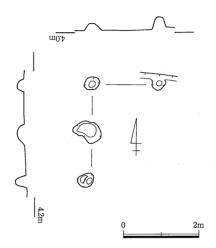


図8 SB1平面図・断面図(S=1/100)

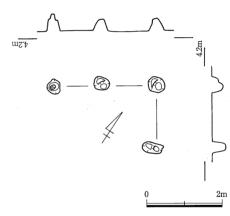


図 9 SB2平面図・断面図(S=1/100)

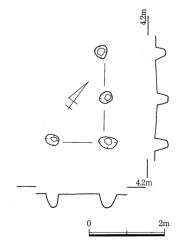


図10 SB3平面図・断面図(S=1/100)

皿(10)と、内彎気味に体部が立ち上がる土師器坏の底部(11)である。

#### - s B 4 -

調査対象地の中央やや北東寄り、SB2の南側で検出した梁間1間(1.7m)・桁行2間(4.6m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行2.3mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN1°Eである。

図化した遺物は12の土師器小皿1点のみである。

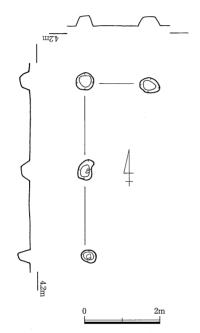


図11 SB4平面図・断面図(S=1/100)

#### -SB5-

調査対象地の中央やや北東寄り、SB4と重なって検出した梁間1間(1.6m)・桁行2間(3.4m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.6m、桁行1.7mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN79°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

#### -SB6-

SB4の東側、対象地のほぼ中央部で検出 した梁間2間(2.3m)・桁行2間(3.7m)の東

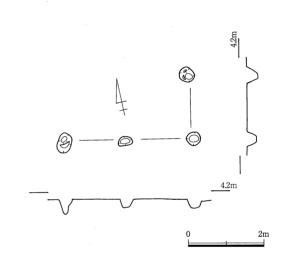


図12 SB5平面図・断面図(S=1/100)

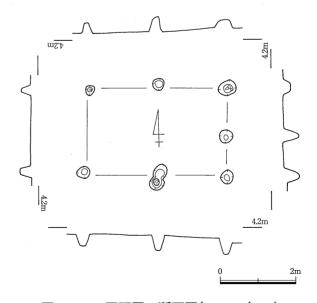


図13 SB6平面図・断面図(S=1/100)

西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.15m、桁行1.65mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN87°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

#### - s B 7 -

対象地のほぼ中央、SB4及びSB6と重なって検出した梁間1間(1.2m)・桁行2間(3.0m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.2m、桁行1.5mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN88°Eである。出土遺物に図化できるものはなかった。

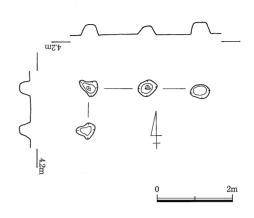
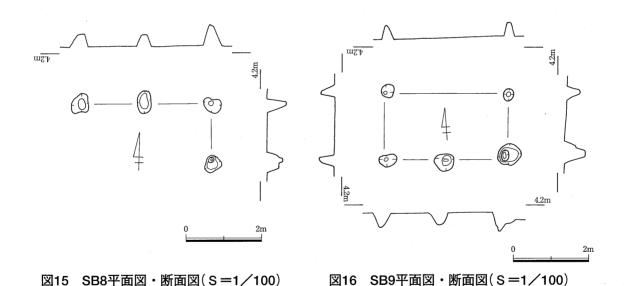


図14 SB7平面図・断面図(S=1/100)

-SB8-

調査対象地のほぼ中央、SB7の南側でSB4と重なって検出した梁間1間(1.5m)・桁行2間(3.4m)の東西棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.5m、桁行1.7mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN88°Eである。出土遺物に図化できるものはなかった。



-SB9-

調査対象地のほぼ中央、SB4及びSB8と重なって検出した梁間1間(1.7m)・桁行2間(3.2 m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.7m、桁行1.6mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN85°Wである。

図化した出土遺物は、外面に鎬蓮弁文の入った13の龍泉窯系青磁碗の体部片1点のみである。

#### -SB10-

調査対象地の東南部で検出した梁間 1 間(1.3m)・桁行 2 間(3.6 m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.3m、桁行1.8m を測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN 1°Eである。

図化した出土遺物は4点である。14の土師器小皿は口径が7.4cmで、口縁が内彎して開く。15の土師器坏底部片は立ち上がりの開きが大きい。16は口径が8.8cmと小さいため、瓦器皿に分類したが、他の皿に比べて器高が高く、薄手で、椀に近い作りである。17は肥前系と見られる陶器椀で、見込み蛇の目釉ハギ、削りだし高台を持つ。

# 

図17 SB10平面図・断面図 (S=1/100)

#### -SB11-

調査対象地の南端やや西より、SB10の東側で検出した梁間1間(1.5m)・桁行2間(3.8m)の南北棟建物である。平均の柱間寸法は梁間1.5m、桁行1.9mを測る。建物の桁行方向の磁北からの偏角はN0°EWである。

図化した出土遺物は6点である。18~20は土師器小皿で、口径は6.9~7.8cmの範囲であるが、20は焼成時の歪みが大きい。19は他の小皿に比べて口縁が長めで、広く開く。21~23は土師器坏で、口径は13.7~14.9cmの範囲である。いずれも口縁はほぼ直線的に開く。23は他よりやや体部の開きが大きい。

図18 SB11平面図・断面図(S=1/100)

#### (3)柵列

#### -SA1-

調査対象地の南半部西端で検出された南北方向の柵列である。検出された柱穴は計4個で、平均の柱間寸法は2.0mを測る。軸線方向の偏角ははN5°Eである。

図化した出土遺物は1点のみで、口径が7.7cmで口縁が内彎して開く土師器小皿(24)である。

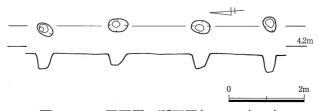


図19 SA1平面図・断面図(S=1/100)

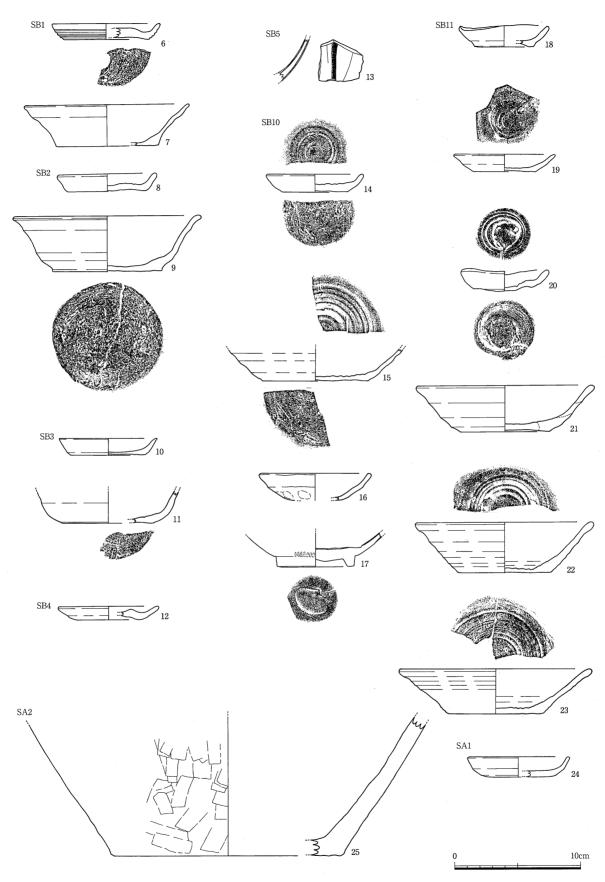


図20 SB・SA出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

調査対象地の中央やや南寄りで検出された東西方向の柵列である。検出された柱穴は計5個で、 平均の柱間寸法は1.6mを測る。軸線方向の偏角ははN79°Eである。

図化した出土遺物は1点のみで、内面全体に自然釉のかかった陶器甕の底部片(25)で、常滑産と見られる。

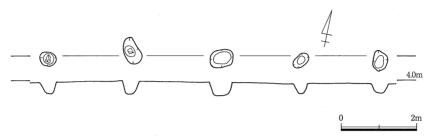


図21 SA2平面図・断面図(S=1/100)

#### -SA3-

調査対象地の西半部南端で検出された東西方向の柵列である。検出された柱穴は計 5 個で、平均の柱間寸法は1.7mを測る。軸線方向の偏角ははN84°Wである。出土遺物に図化できるものはなかった。

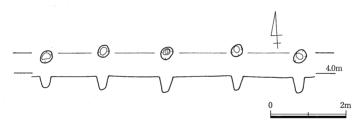


図22 SA3平面図・断面図(S=1/100)

#### (4)土坑

#### -s K 1 -

調査対象地の北西隅、SB1の西側で検出した不整形の土坑で、 最大径は2.3m、長軸方向の磁北からの偏角はN78°Eを測る。

図化した出土遺物は1点のみで、小さめの土師器坏底部片(26)である。

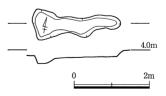


図23 SK1平面図・断面図(S=1/100)

調査対象地の北西部、SB2と重なって検出した不整形の土坑で、 最大径は1.8m、長軸方向の磁北からの偏角はN67°Wを測る。

図化した出土遺物は27の1点のみである。口径が14.8cmで、底部に低い円盤状高台をもつ土師器坏である。

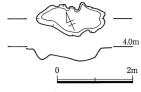


図24 SK2平面図・断面図 (S=1/100)

#### - s K 3 -

調査対象地の中央やや北東、SB4と重なって検出した不整形の土坑で、最大径は2.8m、長軸方向の磁北からの偏角はN23°Eを測る。

図化した出土遺物は13点で、全て土師器である。28~35は 皿で、口径は、最も小さい29が7.2cm、最も大きい34が7.9 cmを測る。器高は最も低い31が1.1cm、最も高い29が1.7cm

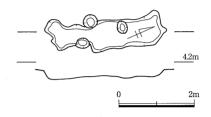


図25 SK3平面図・断面図(S=1/100)

を測る。また、28は口縁が内彎して立ち上がり、器壁の厚みがほぼ均一なタイプ、35は口縁部の器壁を薄く仕上げるタイプである。36~40は坏で、口径は、最も小さい39が12.4cm、最も大きい40が14.0cmを測る。口縁は何れも外反、もしくは外反気味である。また、37と49は器高が口縁の1/4以下と低めである。

#### - s K 4 -

調査対象地の中央やや西より、SB6と重なって検出した不整形の土坑で、最大径は3.1m、長軸方向の磁北からの偏角はN6°Eを測る。

図化した出土遺物は10点である。土師器は41と42の皿のみで、口径はやや大きく(8.7及び8.9cm)、42には低い円盤状高台がつく。43は和泉系瓦器椀で、高台がやや退化するもの



図26 SK4平面図・断面図(S=1/100)

の、口径は16.5cmと比較的大きい。炭素の吸着は不十分で、在地産の可能性も考慮に入れる必要がある。44は龍泉窯系の鎬蓮弁文を持つ青磁碗である。45~48は白磁で、45と46は玉縁の口縁を持つ碗で、47の碗と48の皿は口禿の口縁を持ち、48は内面に一条の界線を巡らし、外面下端は無釉である。49と50は須恵器で、49は古墳時代末の坏身、50は東播系と見られる須恵器鉢であるが、やや作りは雑であり、在地産の可能性もある。

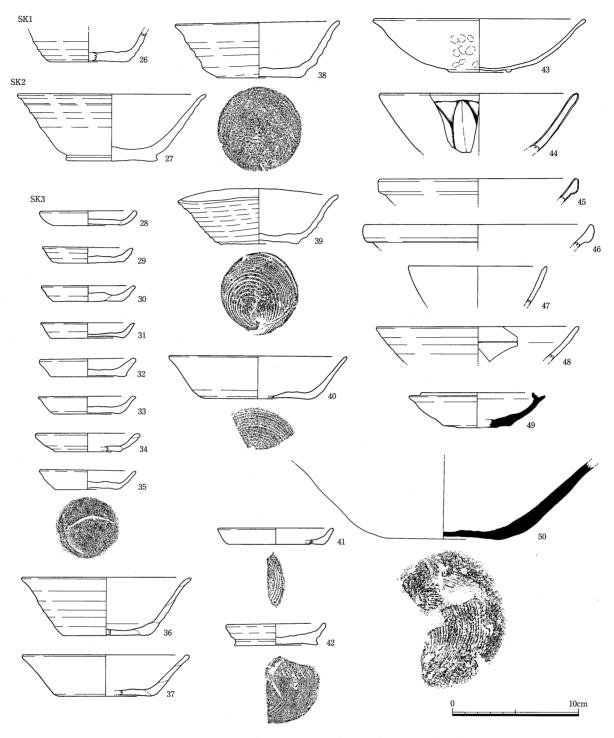


図27 SK出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

#### (5)ピット出土遺物

今回の調査では多くのピットを検出したが、建物跡や柵列に含まれるピット以外からも多くの遺物が出土した。ここでは、それらについてまとめて述べる。なお、遺物は殆どのピットから出土しているが、図化できた遺物が出土したのは以下のP1~P30までの30箇所である。計測表を以下に

#### ーピット計測表ー

	בואוםו										
番号	位置	最大幅(cm)	検出標高(m)	最深標高(m)	深さ(cm)	番号	位置	最大幅(cm)	検出標高(m)	最深標高(m)	深さ(cm)
P1	A0	48	3. 98	3.84	14	P16	A2	24	4. 03	3. 79	24
P2	В0	38	4.01	3. 74	27	P17	В2	64	3. 93	3. 56	37
Р3	CO	45	3. 95	3. 64	31	P18	В2	41	3. 99	3. 61	38
P4	A1	48	4.05	3. 67	38	P19	C2	-32	3.85	3. 59	26
P5	A1	94	4. 05	3. 76	29	P20	C2	71	3. 95	3.64	31
P6	A1	69	4.02	3. 71	30	P21	А3	44	4.01	3.62	39
P7	A1	59	4.03	3. 71	32	P22	D3	72	3. 93	3.65	28
P8	A1	51	4. 02	3. 77	25	P23	D3	96	3. 92	3. 64	28
P9	B1	79	4.02	3.86	16	P24	D3	40	3.81	3. 57	24
P10	C1	37	3.96	3.60	36	P25	D3	54	3. 70	3. 27	43
P11	C1	40	3. 91	3. 70	21	P26	В4	114	3. 93	3. 79	14
P12	A2	36	4. 02	3. 64	38	P27	C4	63	3. 95	3. 63	32
P13	A2	27	4.01	3. 70	31	P28	D4	72	3. 75	3. 41	34
P14	A2	48	4.02	3.70	32	P29	D4	80	3. 74	3. 35	39
P15	A2	38	4.02	3. 76	26	P30	D4	69	3. 89	3. 65	24

- ・P1 口禿の口縁を持つ小振りの白磁碗(51)が出土した。
- ・P2 古代の須恵器坏身の底部(52)が出土した。断面逆台形の輪高台を貼付する。
- ・P3 口径が7.2~7.4cmの土師器小皿(53~55)が出土した。53、54の口縁は若干外反し細くまとめる。その他にやや大きめの土師器坏の底部(56)も出土した。
- ・P4 口径が6.9~7.0cmと小さめで、底部の厚い土師器小皿(57、58)が出土した。
- ・P 5 口径が8.4cm(59)及び7.4cm(60)の土師器小皿が出土した。59は底部を円盤状高台状に成型する。
- ・P 6 口径が6.9~7.3まで(61~63)と、やや大きめの8.0cm(64)の土師器小皿が出土した。その うちで61は口縁が内彎気味に立ち上がるタイプである。その他に、やや小振りの土師器坏 (65、66)が出土した。65はやや低いが円盤状の高台を持つ。
- ・P7 白磁碗の底部(67)が出土した。下部まで施釉し、一部は高台上部にまで釉薬がかかる。

- · P 8 白磁碗の底部(68)が出土した。高台径は小さく、高い。残存部の外面には施釉していない。
- ・P9 土師器小皿(69)が出土した。口径は7.6cmで比較的口縁部が長く薄い。
- ・P10 口径が11.0cmと小振りな坏(70)が出土した。
- · P11 鎬蓮弁文を施した龍泉窯系の青磁碗(71)が出土した。
- ・P12 見込みに櫛描き文を施した同安窯系の青磁皿(72)が出土した。
- ・P13 鎬蓮弁文を施した龍泉窯系の青磁碗(73)が出土した。
- · P14 土師器坏(74)が出土した。口径は10.2cmと小さい。
- ・P15 土師器小皿(75)が出土した。口径は7.9cmで、軽く内彎し、薄い。
- ・P16 土師器坏(76)が出土した。口径が大きく(14.7cm)、器高が低い(3.1cm)。皿に近い形態である。
- ・P17 口径が6.5cmと小さく、口縁の器肉が薄い土師器小皿(77)、及び肥前産と見られる石鍋(78)が出土した。石鍋については、口縁部破損後再加工したと見られる工具痕があり、皿として再利用した可能性がある。
- ・P18 古代の須恵器鉄鉢(79)が出土した。器壁は薄く、口縁は丸く仕上げる。
- ・P19 口径が11.4cmと小さめの土師器坏(80)、及び瓦質三足釜(81)が出土した。足釜の胴部最大径は下方寄りで、口縁は内傾する。脚の最下部は欠損する。内面横ハケ、外面に鍔を貼付する。
- ・P20 木錘(82)が出土した。表面にヒビ割れが入り、風化が進む。
- · P21 土師器小皿(83)が出土した。口径は7.2cmである。
- ・P22 口径7.7cmの土師器小皿(84)、及び口径7.5cmの瓦器小皿(85)が出土した。瓦器の底部は 内鸞し、口縁の横ナデはあまり強く見られない。炭素の吸着はあまりよくない。

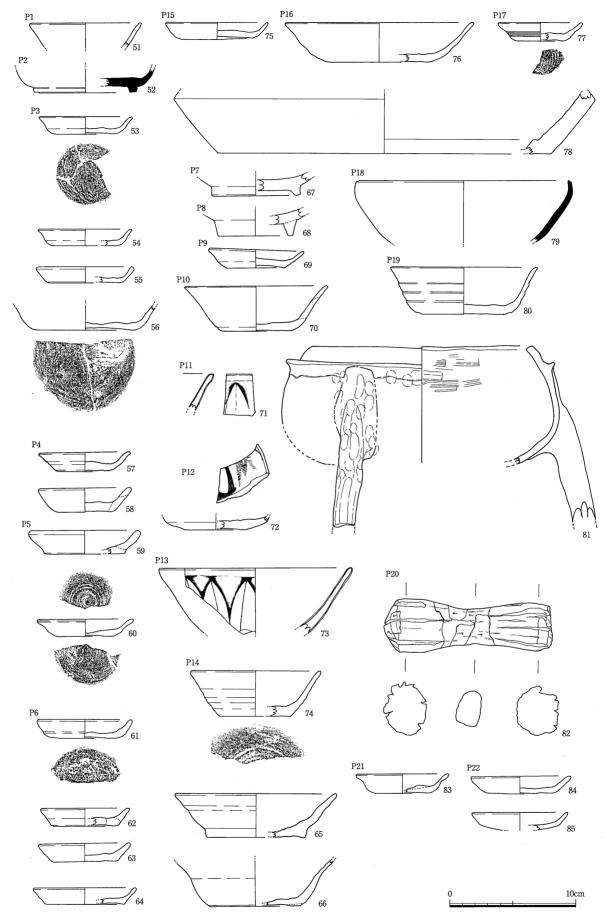


図28 P1~P22出土遺物実測図及び拓影(S=1/3)

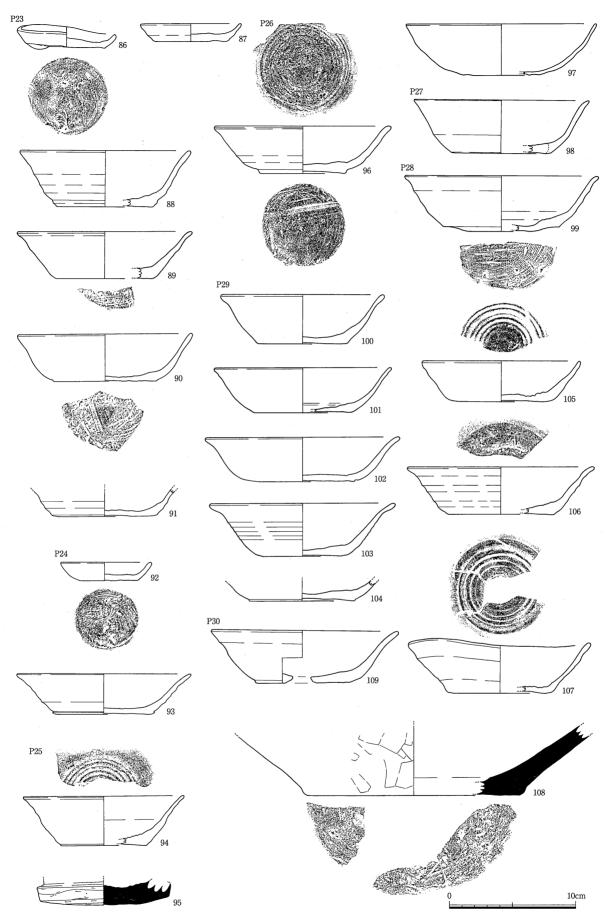


図29 P23~P30出土遺物実測図及び拓影(S=1/3)

- ・P23 土師器小皿(86、87)及び、土師器坏(88~91)が出土した。小皿の口径は7.6cm及び7.9cm で、底部に比べて口縁の器壁が薄いタイプである。坏は口径が13.3cm~13.8cmで僅かに 端反り気味である。
- ・P24 口径が7.1cmの土師器小皿(92)、及び口径が13.8cm、器高が3.2cmと非常に低い土師器 坏(93)が出土した。
- ・P25 口径が12.7cmで口縁端部を薄く仕上げた土師器坏(94)、及び古代の擂鉢底部と見られる 須恵器片(95)が出土した。須恵器は底部のみほぼ完全に残存し、体部は欠損する。
- ・P26 器高が3.8cmと低く、円盤状高台を持つ土師器坏(96)、及び和泉系瓦器椀(97)が出土した。 瓦器椀については炭素の吸着が不充分であり、暗文も見られないため、在地産の可能性が ある。口径が比較的大きい(14.9cm)が高台は観察の限りでは剥落した痕跡は見られず退 化したものと見られる。
- ・P27 口径が13.6cm、器高が4.2cmの土師器坏(98)が出土した。
- ・P28 口径が15.2cmと大きめの土師器坏(99)が出土した。口縁端部は若干端反り気味である。
- ・P29 土師器坏(100~107)が出土した。口径は12.4cm~15.1cm、器高は3.2cm~4.2cmである。 底部のみ出土の104、及び最も小さい105を除き、口縁は外反するものが多い。また、もっ とも口径の大きい102は器高が低く(3.5cm)皿に近い形態である。その他に須恵器甕底部 (108)が出土した。成型・焼成ともしっかりしており、搬入品と見られる。外面は底部を しっかりと成形するが、内面では体部との境界がはっきりしない。見込み部に凹みを形成 する。底径は16.8cmと通常の東播系鉢に比べて大きいため甕に分類したが、底部のみの 出土であるため、それ以外の器種である可能性もある。
- ・P30 つぶれた円盤状高台を持つ土師器坏(109)が出土した。内彎して立ち上がり口縁は外反する。口径は14.6cm、器高は4.3cmである。

#### (6)溝跡

今回の調査では計4条の溝跡を検出した。いずれも南北方向の溝跡で、調査対象地の東側に集中 しており、ほぼ並行して検出された。

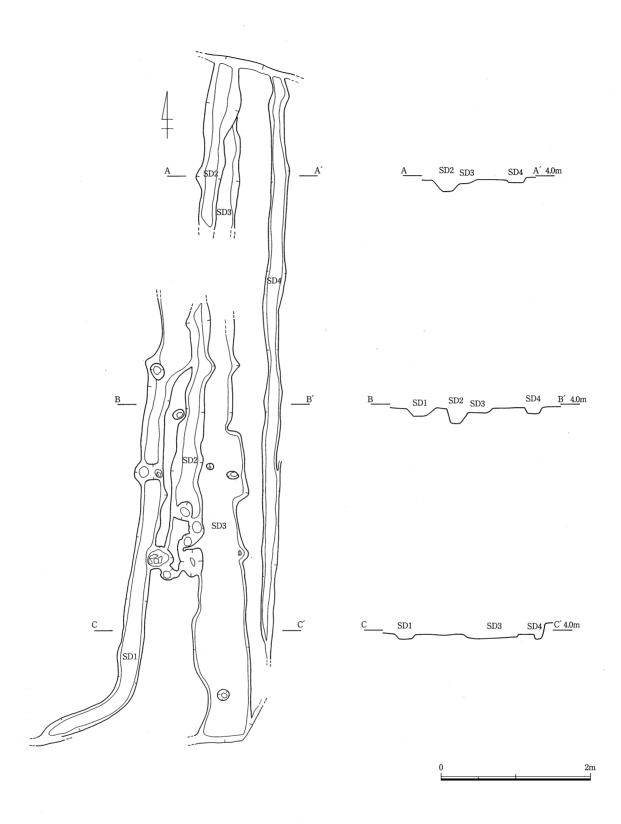


図30 SD平面図・断面図 (S=1/100)

SE1の南側から調査対象地の南端にかけて検出した南北方向の溝跡である。中軸線の方向はN8°Eであり、対象地南端付近で西方に曲がり、N68°Eの角度で対象地外へ続いている。確認できた長さは12.5mである。

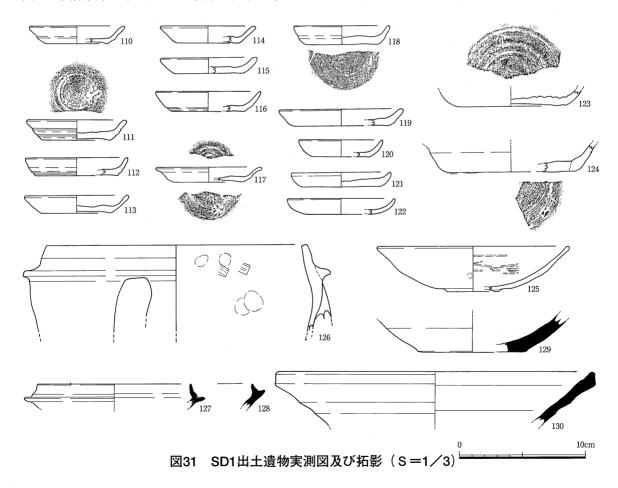
図化した出土遺物は110~130までの21点である。

 $110\sim122$ は土師器小皿である。口径は $7.3\sim8.5$ cmの範囲が11点で、例外的な大きさの6.5cm (120) と9.5cm (119) が 1 点ずつ存在する。 $110\sim113$ は底部と口縁部の境界が明瞭で口縁を薄く作るタイプ、 $114\sim116$ は底部と口縁部の境界は比較的明瞭だが腰部が丸みを持つタイプ、117は口縁端部が外反するタイプ、118と119は口縁端部がすぼまるタイプ、 $120\sim122$ は口縁が内彎するタイプである。

123、124は土師器坏の底部である。底径は9.0及び10.2cmと比較的大きく、口径は15cm内外になるものと思われる。

125の瓦器椀は口径は15.0cmだが、器高が3.6cmと低い。高台は比較的しっかりしている。炭素の吸着が不充分で在地産の可能性もある。126は瓦質の足釜で口縁は内傾、外面に鍔、脚を貼付する。

127~130は須恵器で、127、128は古墳時代末の坏身で127は立ち上がりが比較的長い。129、130は中世の東播系鉢である。129は腰部が若干内彎して立ち上がり、130は口縁端部を少し上下に拡張する。



調査対象地の南東部から北端にかけて、SD1のすぐ東側で検出した南北方向の溝跡である。途中 SE1 によって切られ、北端は対象地外へ続いている。中軸線の方向は $N5^\circ$  E であり、確認できた長さは12.5mである。

図化した出土遺物は131~164までの34点である。連続した遺構であるが、途中をSE1によって切られているため、SE1を境にして北半部と南半部に分けて記述する。

#### · S D 2 南半部の遺物

131~145は土師器小皿である。口径は6.3~8.4cmと範囲が広い。概ね底部に比べて口縁部の器壁は薄く、端部ほど薄くなる傾向にある。131~135は底部を高台状に形成するタイプ、136~143は高台の形成は見られないが、底部と口縁部との境界が比較的明瞭なタイプで口縁は概ね内彎して開く。144、145は器高が非常に低いタイプである。

146~150は土師器坏で、底径は7.8~9.4cmと範囲が広い。口縁部まで残存しているのは2個体で、そのうち149は口縁部の器壁を薄く作り、口径は13.7cmである。端反りの150は口径が15.3cmと大きいが器高が3.6cmと非常に低く皿に近い形態である。

151~153は瓦器である。151の皿は器壁の厚みが均一で、底部から口縁にかけて内彎して開く。 見込みにジグザグの暗文が残る。152、153の椀は体部の内面に横方向を基調とする暗文が残る。口 径が11.4cmと小振りの152は炭素の吸着が大変に良好で、逆に153は吸着が非常に悪い。

154は須恵器鉢で内外面ともに腰部は丸みをもって立ち上がる。

#### ・SD2 北半部の遺物

155は土師器小皿である。口径は8.4cmで、底部と口縁部とで厚みがあまり変わらず、丸みを持って立ち上がるタイプである。

 $156\sim160$ は土師器坏で、そのうち $156\sim158$ の口径は $11.6\sim14.0$ cmの範囲で何れも若干端反り気味である。また159、160は口径がそれぞれ15.2cm及び14.8cmと大きいが、器高が低く皿に近い形態で、特に160は口径の1/5以下の2.9cmしかない。何れも口縁部を薄く仕上げた端反りの器形である。

161は龍泉窯系の青磁碗で、内面に横描き文及びヘラ描文を施す。162は同安窯系の青磁碗で、内面にはジグザグ、外面は縦方向の横描文を施す。

163は和泉系瓦器椀で内側面に円周方向、見込みに平行な暗文が残る。高台は剥落、口径14.7cm、器高3.9cmである。164は瓦質羽釜で、口縁は内傾する。調整は丁寧であり、胎土から見ても搬入品であろう。残存部からは足釜であるかどうか不明である。

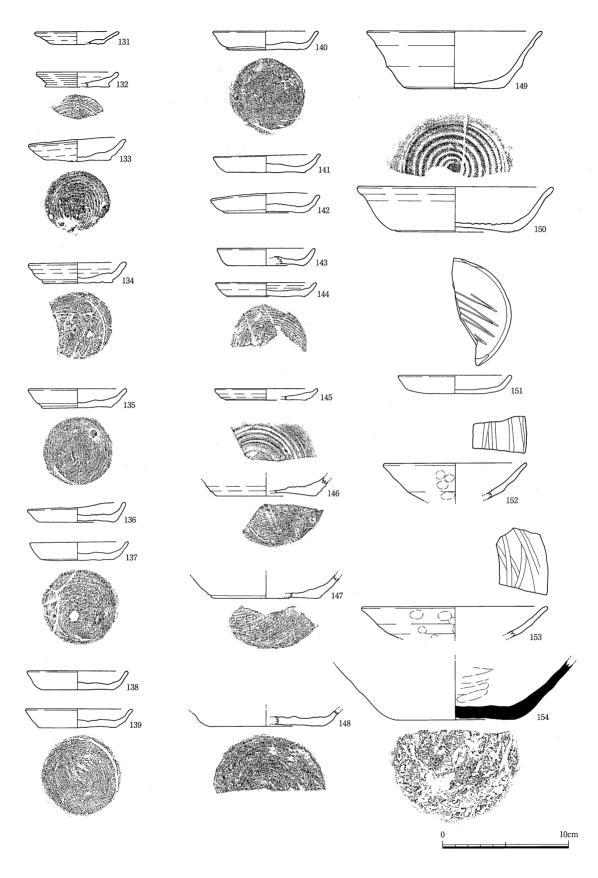


図32 SD2南半部出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

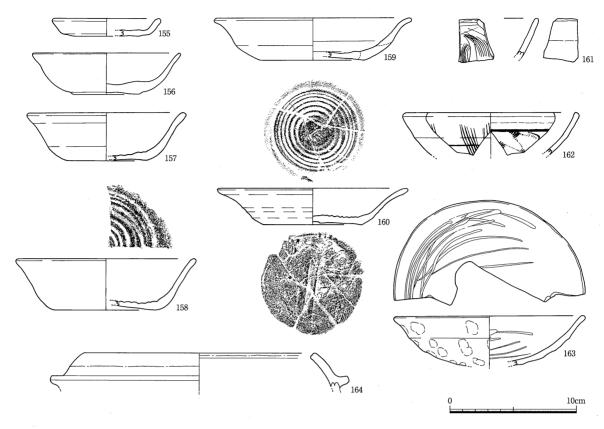


図33 SD2北半部出土遺物実測図及び拓影 (S=1/3)

#### -sd3-

SD2のすぐ東側で、重なって検出した南北方向の溝跡である。南北端とも対象地外へ続いている。中軸線の方向は $N1^\circ$ Wであり、確認できた長さは18.5mである。

図化した出土遺物は165~169の6点である。

 $165\sim167$ は土師器小皿である。口径は $6.9\sim8.0$  cmであり、何れも口縁は直線的に開く。166は厚 ほったい口縁、他の2点は端部を薄く仕上げる。

168は口禿の白磁小皿で、腰部の屈曲点が僅か

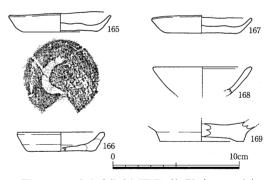


図34 SD3出土遺物実測図及び拓影(S=1/3)

に残る。169は白磁碗の底部で畳付け部分の削り出しが少ない。残存部の外面は全て無釉である。

#### -SD4-

SD3のすぐ西側で、調査対象地北端から東端にかけて検出した南北方向の溝跡である。南北端とも対象地外へ続いている。中軸線の方向は $N1^\circ$ Eであり、確認できた長さは19.5mである。出土遺物に図化できるものはなかった。

## 第3節 包含層出土遺物

#### (1)2層出土及び表採遺物

水田表土と検出面の間の土層出土の遺物をまとめた。170~177及び179~184の14点である。178の青磁片のみは表採遺物であるが、一緒に記述した。

170は古代の須恵器坏蓋で平らな天井部から屈曲して下がり、後外反する。口縁端部は下方に屈曲する。

171は土師器小皿で、平らな底部から口縁が直線的に開く。底部と口縁部の厚みにはあまり差が見られない。

172は瓦器皿で、成型は椀と同様に口縁端部に円周方向の強い指押さえが認められる。173は瓦器椀で、口径は14.7cm、断面三角形の輪高台を貼付する。炭素の吸着はやや不充分である。174は瓦質の羽釜で、残存部からは足釜であるかどうかの判別はできない。また、残存部から見る限り口縁はほぼ直立している。内外面とも炭素の吸着が殆ど見られず、土師質に近い焼成である。

175, 176は白磁四耳壺で同一個体の可能性が高い。175は頸部片で、内面屈曲点に凹線が入り、 肩部外面には耳の剥落した跡が残る。176は下胴部片で、内面にロクロ成型時の工具痕が明瞭に残 る。177は白磁碗で、内面見込み及び体部下部は無釉である。また、内面見込みと体部との境界に 界線が入る。

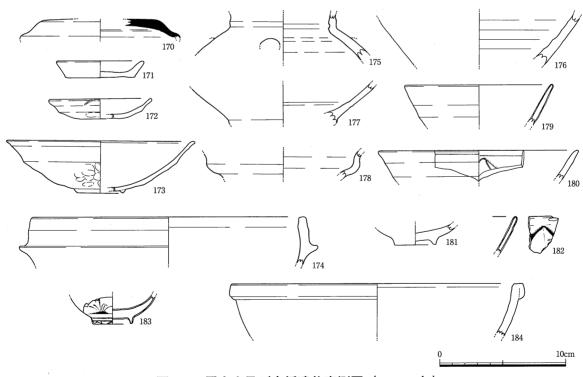


図35 2層出土及び表採遺物実測図(S=1/3)

178は青磁皿に分類したが、特殊な器形で外方に2回、内方に1回の合計3回大きく屈曲する。 細片であり皿以外の器形である可能性もある。179~182は青磁碗である。179の残存部は無文、180 は内面に薄い文様を施す。及び182は龍泉窯系の鎬蓮弁文が入る。181は断面三角形の小さい高台を削り出す小碗である。

183は青花小碗で、外面に草花文を施す。184は陶器鉢で、内外面とも灰釉がかかり、口縁を肥厚させる。

#### (2) 3 層出土遺物

重機による表土掘削後、検出面をそろえるために人力によって掘削した、遺構埋土とほぼ同じ土層から出土した遺物をここにまとめた。主に対象地の北側 1/3 程度の部分である。185~211までの27点が土師器、212~235までの24点が土師器以外の合計51点である。

185~194は土師器小皿である。口径は6.3cmの185を除けば、6.9cm~8.3cmの範囲に収まる。185は底部と口縁部との境界が明瞭で、口縁がやや外反するタイプ、186は底部と口縁部との境界が比較的明瞭で口縁が厚ぼったいタイプである。188~190は厚くて平らな底部に薄い口縁がほぼ直線上に開くタイプである。187、191~194は口縁が内彎気味に立ち上がるタイプである。

195、196は土師器小坏である。口径、器高は195が6.0cmおよび1.9cm、196が6.4cmおよび1.8 cmである。他の小皿に比べると口径に対する器高の割合が高いため別に分類した。195は若干端反り気味で、196は直線的に開く。

197~211は土師器坏である。その内、197~200は低い円盤状高台のような底部を持つタイプである。いずれも内彎して立ち上がり、後に外反する形態である。口縁の残存しているものの口径は、13.3cm(199)及び15.0cm(200)である。そのうち200は器高が3.9cmと低く、坏または皿に分類されよう。201~211は底部が平らで高台のないタイプである。202は口径が11.2cmで小振りで、口縁は直線上に平開く。203は口径は12.3cmで器高は4.6cmと比較的高く、口縁が大きく外反する。204は口径が13.2cmで、器高が2.9cmと低く皿に近い。206は口径が13.1cmで口縁が直線的に開く。208は口径が13.1cmで口縁部の器壁を薄く仕上げ、口縁が外反する。209は口径が13.6cmで口縁が直線的に開く。210は口径が13.7cmで口縁部の器壁を薄くつくる。211は口径が14.2cm、器高が3.6cmで皿に近い器形である。

212~215は須恵器である。212は古墳時代末の坏身で立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。 焼成は土師質で不良である。213は古代の坏身で、小さい輪高台を貼付する。214は東播系の片口鉢 で口縁端部を上方に拡張する。215は口縁端部を上方につまみ上げる、残存部から判断する限り、 口縁部の外傾が大きいため盤として分類した。

216,217は瓦器皿である。ともに口縁部外面の円周方向に強い指押さえが残る。炭素の吸着も良好で、特に216内面には光沢が見られる。

218~224は瓦器椀である。218は側面に円周方向、見込みには平行な暗文を施す。外面下部の炭素吸着は不充分だが、他は概ね良好である。219も218と同様の暗文が入るが、外面には炭素の吸着

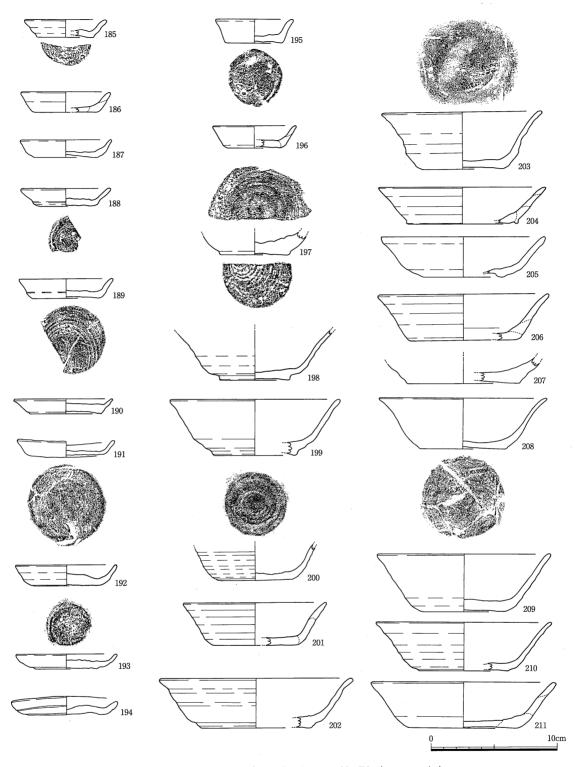


図36 3層出土土師器実測図及び拓影 (S=1/3)

が殆ど見られない。220、222は内外面とも炭素の吸着が不充分である。223は残存部に炭素の吸着が全く見られず、断面三角形の形骸化した輪高台を貼付する。224は炭素の吸着が良好で内面には光沢が見られる。貼付輪高台もしっかりした作りで、ほぼ断面逆台形である。互いに接合しない2片であるが、調整も似通っており、出土位置も近いため同一個体として扱った。

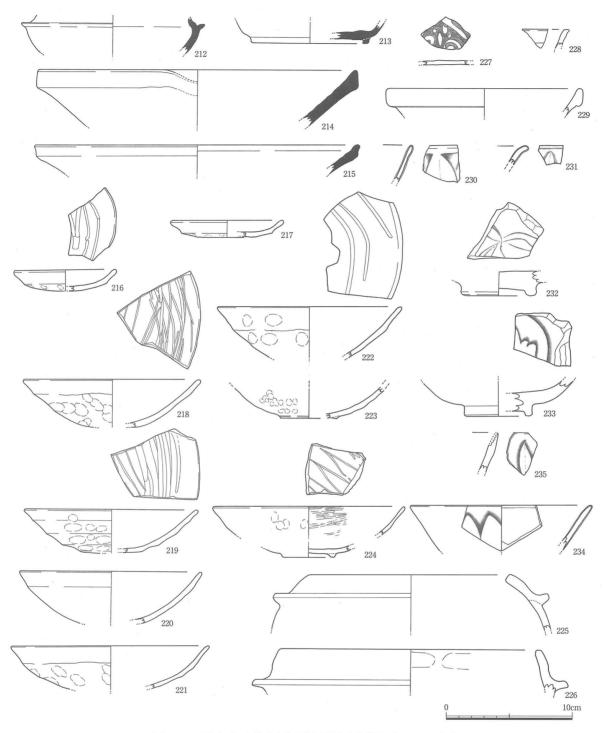


図37 3層出土遺物(土師器以外)実測図 (S=1/3)

225、226は瓦質羽釜である。ともに口縁は内彎、内傾し口唇は軽く面取り、外面に鍔を貼付する。 225は内外面とも丁寧な調整で、炭素の吸着も比較的良好である。また、胎土に雲母が見られるこ とから搬入品である可能性が高い。

227は扁平であるが器肉が非常に薄い破片で、青白磁皿の見込み部である可能性が高い。両面とも施釉される。片面(見込み部)のみに施文され、緑がかった釉の中に灰白色の浮文が浮かび上がる。

両面に細かい砂が付着する。

228、229は白磁碗である。228は口縁端部を軽く外側につまみ出し、229は玉縁の口縁を持つ。

230~235は青磁碗である。230、231、234、235は外面に鎬蓮弁を施すが、234は蓮弁内の鎬が弱い。 また231は口縁端部が大きく外反する。232、233は底部で、ともに高台外面まで施釉し、畳付部の削り出しが弱い。見込みにヘラ状のもので文様を描く。232は幅広の高台で、233の高台幅は狭い。

また、3 層からは渡来銭も1 点出土している。腐食がはげしいため、実測図、採拓等はできなかったため、X線写真をP. 78に掲載した。開元通宝(開通元宝)とみられる。

## 第4節 試掘調査出土遺物

#### (1)試掘調查1

試掘調査1は本調査に先だって行った試掘調査である。大部分 を遺構の検出まででとどめたため、出土遺物はあまり多くない。

236~238は須恵器である。236はTP-2出土の古墳時代末の坏身で、立ち上がり・受け部ともに小さい。237はTP-1出土の甕で、頸部で大きく屈曲し内面に粘土を重ねる。細片であるため口径を復元していないが、ほぼ40cm内外はあると見られる大型品で、古代末もしくは中世のものと思われる。238はTP-1出土の古代の坏身で底部に輪高台を貼付する。

239、240はTP-3出土の土師器小皿である。239は口径が8. 1cmで口縁が内彎気味に開き、端部を薄く仕上げる。240は口径が9.2cmで、直線的に立ち上がる。

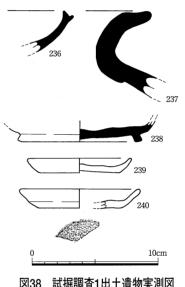


図38 試掘調査1出土遺物実測図 及び拓影(S=1/3)

#### (2)試掘調査2

試掘調査2は今回の本調査対象地の北東に隣接する敷地である。TP-5において比較的新しい時代のものと思われる小さな溝跡を検出したが、遺物は出土しなかった。各試掘坑とも、明確な遺物包含層は存在せず、図化した遺物は大部分が流れ込みによるものである。

#### 一弥生土器一

試掘調査2ではTP-2及びTP-3から弥生土器が出土した。図化した遺物は15点で、その内TP-2からは表土下標高約3m(表土下約1.2m)程度の洪水礫層と見られる砂礫層中の粘土ブロックから245、251の2点が出土した。他は全TP-3からの出土で、標高3m程度のシルト・粘土層中に薄い砂層が挟まっており、その砂層中から出土した。共に流れ込みと見られる。

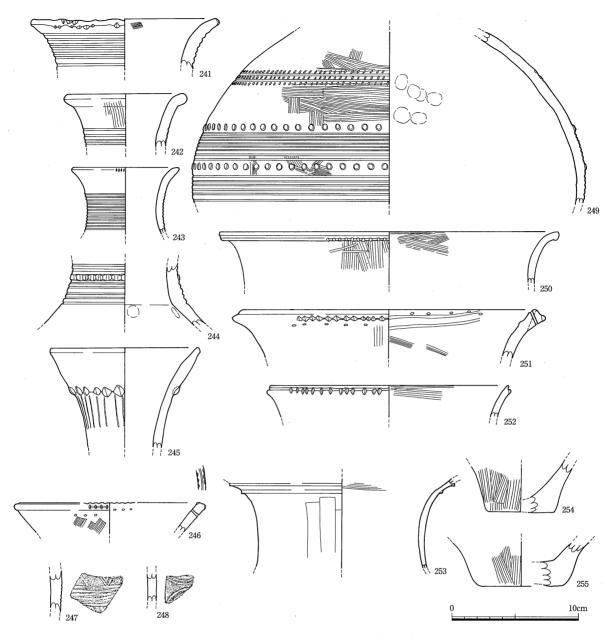


図39 試掘調査2出土遺物実測図及び拓影1(S=1/3)

241~244は口縁部もしくは頸部に多条沈線を施す壺で、241は口唇部内外縁に刻み目を施し、244は沈線の間に扁平な刻目突帯を配する。245は口縁部全体を肥厚させ、その下の頸部に縦方向に摘んだ浮文と縦方向のへラ描き沈線を配する長頸壺である。246は口縁端部に穿孔し、口唇部内外縁に刻み目を施し、口唇は強い横ナデによって凹線状に凹む。247、248は細片で、247は多条沈線の両側に二重沈線の山形文を配し、248は二重沈線の円形文が残るが、細片であるため木葉文の一部である可能性もある。249は壺の胴部片で、実測図は同一個体と思われる二点の合成である。肩部付近に沈線及び列点文、胴部に多条沈線と円形浮文を配する。

250~252は甕の口縁部で、いずれも口唇部外縁に刻み目を施す。251は口縁部を肥厚させ、穿孔列を配し、内面に断面三角形の小さな突帯を貼付する。また、251、252の口唇は強い横ナデにより

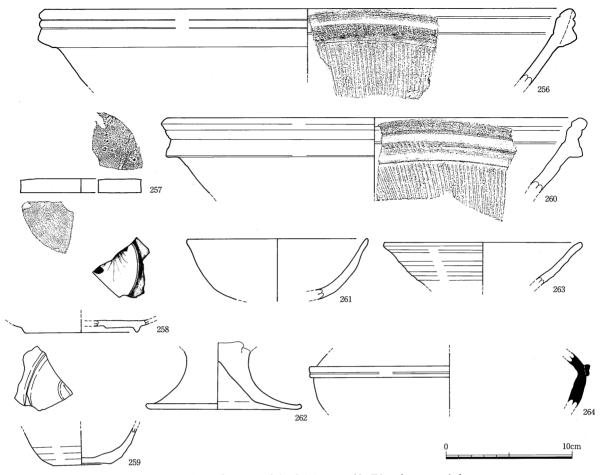


図40 試掘調査2出土遺物実測図及び拓影2(S=1/3)

凹線状に凹む。253は薄手の壺で245と同様の黒っぽく砂粒の多い胎土である。内面に横ハケのある側を口縁として図示した。口縁部外面に小さい断面三角形の突帯を二条貼付する。

254、255は壺の可能性が高い底部片で、小さい底部から急激に立ち上がり、後に外反する。

#### 一古墳時代以降の遺物ー

256~259はTP-1からの出土である。いずれも耕作土直下の層からの出土で近世の遺物と考えられる。256は擂鉢で口縁部を外側に肥厚させる。257は窯道具で能茶山窯で使用されたものであると思われる。258は染付皿で畳付の中央を凹ませて中央に施文し周囲の釉を掻き取る。上面は見込みに草花文、周囲は全体に着色する。259は土師質であるが、外面を鉄分により黒く着色する。また、外面にタール状のススが付着する。260~262はTP-2からの出土である。289の擂鉢は耕作土直下の層からの出土で、口径は違うが237とほぼ同様の作りである。261の鉢は弥生土器の出土した土層とほぼ同様の層から出土したが、古墳時代の土師器として扱った。262の高坏は弥生土器の出土した土層の直上の砂礫層からの出土である。263の土師器坏はTP-3からの出土で、弥生土器の出土した砂層の直上の層から出土した。264の須恵器壺は砂礫層中の粘土ブロックからの出土で、肩部に扁平な突帯を貼付する。突帯を除いた肩部の形態から見て古代の遺物と見られる。

## 遺物観察表1(1~23)

_		<b>奈</b> 衣	г —			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		I	I <sub></sub> .		I
No.	出土	器種	法量(			形態・施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土		備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
1	SE1	土師器	(6.3)	1.6	3.9	口縁は短く上外方へ直線的に延びる。	ナデ	橙2.5YR6/6	緻密、中砂をわずかに含む。	1/3	底部糸切り
		小皿					ナデ	にぶい赤褐5YR5/3	良		
2	SE1	土師器	(6.1)	1.5	(5.1)	口縁は短く上外方へ直線的に延びる。底部は	ナデ	橙5YR6/6	緻密、微砂を僅かに含む。	1/3	底部糸切り
		小皿				つぶれて外にはみ出す。	ナデ	橙2.5YR6/6	良		
3	SE1	土師器.	6.9	1.4	4.9	口縁は短く上外方へ少し外反して延びる。底	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	緻密、微砂を僅かに含む。	1/2	底部糸切り
		小皿				部は少しつぶれる。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	良		
4	SE1	土師器	(6.5)	1.5	(4.4)	見込みに渦巻状成形痕。中心部は外側へ向	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	密	1/4	底部糸切り
		小皿				けてすり消し。口縁は短く上外方へ延びる。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	良好。		-
5	SE1	青磁	(16.6)	(2.1)		内面口縁直下に界線二条。		断面:灰白N7/	緻密	1/10	
		碗						釉:オリーブ灰2.5GY6/1	良		
6	SB1	土師器	(8.4)	1.3	(6.6)	薄い口縁は短く上外方に開く。外側面に工具	回転ナデ	橙5YR7/8	密	1/4	底部糸切り
		小皿				痕が巡る。	回転ナデ	橙5YR7/8	良好		
7	SB1	土師器	(12.9)	3.3	(8.1)	口縁は上外方に開く。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/3	密	1/4	摩滅が激しい。
		坏					回転ナデ	浅黄橙10YR8/3	良好		
8	SB2	土師器	7.6	1.4	6.2	見込みに渦巻状成形痕。口縁は短く上外方	回転ナデ	橙5YR7/6	密	1/2	底部糸切り
		小皿				に延びる。	回転ナデ	橙(5YR7/6)	良好		
9	SB2	土師器	(14.5)	4.4	8.7	見込みの渦巻状成形痕をナデ消し。微かな円	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	密、微細な長石を若干含む。	1/2	底部糸切り
		坏				盤状高台を持つ。口縁は上外方に開き、端部		浅黄橙7.5YR8/6	やや良好		
					-	付近で外反する。					
10	SB3	土師器	77.	1.3	5.8	短い口縁は上外方へ延びる。	ナデ ナデ	灰白(10YR8/1)	細砂を多く含む。	1/2	
	0.50	小皿		1.0	0.0	72. 13. 13. 13. 13. 13. 13. 13. 13. 13. 13	, , , ,	灰白(10YR7/1)	不良	7, -	
11	SB3	土師器		(2.6)	7.3	底部から丸みを持って立ち上がる。	回転ナデ	橙5YR6/6	密、微砂を含む。	1/4	底部糸切り。
11	303	坏		(2.0)	1.5		回転ナデ	にぶい黄橙10R6/4	良好。	1/ 1	ECB17K 93.7%
10	CD4	土師器	(7.0)	1.1	(E 0)	毎い自続け上加土に関え 度如け小! へども			密、微〜細砂を少量含む。	1/4	底部糸切り
12	SB4		(7.8)	1.1	(5.0)	短い口縁は上外方に開く。底部は少しつぶれ		にぶい黄橙10YR7/4		1/4	成節ボ切り
_	ano.	小皿		(0, 0)		5.	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	良好	μ.	龍泉窯系
13	SB9	青磁		(3.3)		外面に鎬蓮弁文を施す。		灰白N8/	密、微砂を含む。	νл	<b>爬承羔</b> 术
_		碗						オリーブ灰2.5GY6/1	良好。	0.70	physical de Limito
14	SB10	土師器	7.4	1.4	5.1	見込みに渦巻状成形痕。短い口縁は上外方		浅黄橙10YR8/4	密、微細な長石を若干含む。	2/3	底部糸切り
_		小皿				に開き、若干内彎する。	回転ナデ	浅黄橙10YR8/4	良好。		
15	SB10	土師器		(2.6)	8.3	見込みに渦巻状成形痕。底部から丸みを持		橙5YR6/8	密、小さい長石を含む。	1/4	底部糸切り
4		坏				って上外方に立ち上がる。	回転ナデ	橙5YR6/6	良好		
16	SB10	瓦器	(8.8)	(2.2)		薄手の作りで、口縁にかけて内彎する。	ナデ	灰 (N4/)	緻密	1/5	外面に指頭圧痕
		Ш					ナデ	灰(N4/)	良		
17	SB10	陶器		(2.7)	6.1	断面逆台形の高台を削り出す。見込み内部		断面:灰白2.5Y8/2	密、微砂を含む。		内面蛇の目釉はぎ
		椀				回転へラ削り。	ヘラ削り、ナデ	釉:緑灰10GY6/1	良好	3/4	肥前系
								見込み透明釉			
18	SB11	土師器	(6.9)	1.7	(4.6)	短い口縁は底部との間に明瞭な境界を持ち、		にぶい橙7.5YR7/4	小さい長石・石英を多く含む。	1/3	
		小皿				直線的に上外方に開く。		橙2.5YR6/6	良		
19	SB11	土師器	7.8	1.4	4.9	見込みに渦巻状成形痕。器壁は薄く、口縁は	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	やや密、微細な長石,微砂を	2/3	底部糸切り
1		١.				大きく上外方に開く。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	少量含む。		
		小皿							良好		
		小皿									
20	SB11	小皿 土師器	6.7~	1.2	4.5	見込みに渦巻状成形痕、後指押さえ。短い口	回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	密	完形	底部糸切り。平面型
20	SB11	土師器	6.7~ 7.4	1.2	4.5	見込みに渦巻状成形痕、後指押さえ。短い口 縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚		にぶい橙7.5YR6/4 橙2.5YR6/8		完形	底部糸切り。平面型は大きくゆがむ。
20	SB11	土師器		1.2	4.5				密	完形	
		土師器	7.4		4.5 7.0	線は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚 は変して上外方に開く。器壁は厚	回転ナデ		密良好	完形 1/2	
		土師器	7.4			縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚め。	回転ナデ	橙2.5YR6/8	密良好		は大きくゆがむ。
21	SB11	土師器 小皿 土師器	7.4	3.7		縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚め。 見込みに渦巻状成形痕。口縁はほぼ直線的	回転ナデ ナデ ナデ	橙2.5YR6/8 浅黄橙(7.5YR8/4) 浅黄	密 良好 粗。細砂を含む。	1/2	は大きくゆがむ。
21	SB11	土師器 小皿 土師器 坏	7.4	3.7	7.0	縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚め。 見込みに渦巻状成形痕。口縁はほぼ直線的 に上外方に開く。	回転ナデ ナデ ナデ	橙2.5YR6/8 浅黄橙(7.5YR8/4) 浅黄橙(7.5YR7/4)	密 良好 粗。細砂を含む。 不良	1/2	は大きくゆがむ。
21	SB11	土師器 小皿 土師器 坏 土師器	7.4	3.7	7.0	縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚め。 見込みに渦巻状成形痕。口縁はほぼ直線的 に上外方に開く。 見込みに渦巻状成形痕。口縁は若干端反り	回転ナデ ナデ ナデ 回転ナデ	橙2.5YR6/8 浅黄橙(7.5YR8/4) 浅黄橙(7.5YR7/4) 橙7.5YR7/6	密 良好 粗、細砂を含む。 不良 やや密、微細な長石,微〜細	1/2	は大きくゆがむ。
21	SB11	土師器 小皿 土師器 坏 土師器	7.4 13.7 13.8	3.7	7.0	縁は若干内彎して上外方に開く。器壁は厚め。 見込みに渦巻状成形痕。口縁はほぼ直線的 に上外方に開く。 見込みに渦巻状成形痕。口縁は若干端反り	ロ転ナデ ナデ ナデ 回転ナデ	橙2.5YR6/8 浅黄橙(7.5YR8/4) 浅黄橙(7.5YR7/4) 橙7.5YR7/6	密 良好 粗。細砂を含む。 不良 やや密、微細な長石,微〜細 砂を少量含む。	1/2	底部糸切り

## 遺物観察表2(24~46)

No.	出土	器種	法量(c	m)		形態・施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		_	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
24	SA1	土師器		1.6	(5.8)	口縁は内彎しながら上外方に開く。	ナデ	浅黄橙7.5YR8/6	やや粗。細砂を含む。	1/3	底部糸切り
		小皿	,,,,		(0.0)		ナデ	橙5YR7/6	良		
25	SA2	陶器		(11.0)	(18.4)			赤褐10R5/3	密、微砂を含む。	1/8	常滑系
		甕		(2210)	(2012)	ら、ほぼ直線的に上外方に開く。	ナデ	灰オリーブ5Y5/3	良好		
						S. International Control of the Cont	, ,	断面:灰白N8/			
26	SK1	土師器		(2.4)	6.0	やや小さめの底部から、上外方に開く。開き	同転十デ	にぶい橙7.5YR7/4	密	1/3	
20	JIVI	坏		(2.1)	0.0	はやや小さめ。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好	1,0	
27	SK2	上師器	14.8	5.3	7.2	見込みに渦巻状成形痕。低い円盤状高台か		橙2.5YR6/8	やや密、微〜細砂、チャートを	1313	底部糸切り
	SINZ	坏(椀)	14.0	0.0	1.2	ら上外方に開き、口縁部で若干外反、端部は		橙5YR7/8	含む。		平面型は大きくゆが
		#1 (17B)				薄く仕上げる。	1140477	12011170	良好。	70,12	t.
28	SK3	土師器	7 7	1.2	5.5	短い口縁は、内彎気味に上外方に開く。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	細砂を多く含む。	1/2	底部糸切り
40	21/2	小皿	1.1	1.2	5.5		ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	不良	1,2	ACEDIN 937
29	SK3	土師器	7.0	1.7	5.5	平らな底部から、明瞭な境界を持って、短い		にぶい黄橙101K7/2	比較的緻密、中砂を含む。	1414	底部糸切り。
29	21/2		1.2	1.7	5.5	十つな底部がつ、切除な現外を行って、短い     口縁が内彎気味に開く。	ナデ		良	完形	EC 11/1 93 9 6
-	01/0	小皿	(7.4)	1.0	(5.5)		ナデ	にぶい黄橙10YR7/4		1/4	
30	SK3	土師器	(7.4)	1.2	(5.5)	平らな底部から、明瞭な境界を持って、短い		にぶい黄橙10YR7/2	中砂を僅かに含む。	1/4	
_		小皿				口縁が立ち上がる。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	不良	eta TK	richa de la
31	SK3	土師器	7.4	1.1	5.7	平らな底部から短い口縁が上外方に開く。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	中砂を含む。	元形	底部糸切り。スス付
		小皿					ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	良		着。灯明皿か
32	SK3	土師器	7.4	1.6	5.8	平らな底部から、明瞭な境界を持って、短い		にぶい黄橙10YR7/3	緻密、細砂を僅かに含む。		底部糸切り
		小皿				口縁が立ち上がる。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	不良	完形	
33	SK3	土師器	7.6	1.3	5.7	平らな底部から、短い口縁が上外方に開く。	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	緻密、中砂を僅かに含む。	1/2	
		小皿					ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	不良		
34	SK3	土師器	(7.9)	1.5	(5.1)	狭く平らな底部から、明瞭な境界を持って長		にぶい橙5YR7/6	細砂を多く含む。	1/3	
		小皿				めの口縁が内彎気味にやや大きく開く。	ナデ	にぶい橙5YR6/3	良		
35	SK3	土師器	7.5	1.6	4.8	平らな底部から、明瞭に境界を持って上外方		灰白10YR8/2	密、微砂を含む。	完形	底部糸切り
		小皿				に開く。口縁はやや薄め。	回転ナデ	灰白10YR8/2	良好。		
36	SK3	土師器	(13.1)	4.6	6.6	底部から、やや内鬱気味に立ち上がり、端部		にぶい橙(5YR7/3) 	中砂を含む。	1/3	底部糸切り
		坏				で外反する。口縁の器壁は薄い。	ナデ	灰白(7.5YR8/2)	良		
37	SK3	土師器	(13.0)	3.2	(7.2)	底部から、はぼ直線的に立ち上がる。口縁の	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	中砂を含む。	1/3	底部糸切り
		坏				器壁はやや薄い。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	良		
38	SK3	土師器	12.8	4.4	6.6	口縁は、平らな底部から上外方に開き、端部	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	密、微細な長石,微砂を少量	完形	底部糸切り
		坏				で外反する。	回転ナデ	橙5YR7/6	含む。		
									やや良。		
39	SK3	土師器	12.4	4.4	6.2	底部から内彎気味に立ち上がり、端部で外反	回転ナデ	橙5YR7/8	密、微細な長石,微〜細砂を	完形	底部糸切り。平面型
		坏				する。	回転ナデ	橙5YR7/6	少量含む。		は大きくゆがむ。内
									良好。		面にスス付着。
40	SK3	土師器	(14.0)	3.4	(8.4)	平らな底部から短めで薄い口縁が上外方に	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	密	1/4	底部糸切り
		坏				開く。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	良好		
41	SK4	土師器	(8.9)	1.3	(7.4)	平らな底部から短い口縁が上外方に開く。	回転ナデ	橙5YR7/6	やや密、微細な長石を含む。	1/4	底部糸切り
		小皿					回転ナデ	橙5YR7/6	良好		
42	SK4	土師器	(8.7)	1.7	(6.6)	見込みに渦巻状成形痕。平らな円盤状高台	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	密	1/4	底部糸切り
		小皿				から、短い口縁が上外方に開く。	回転ナデ	灰白10YR8/2	良好		
43	SK4	瓦器	(16.5)	4.3	5.0	底部から内彎して立ち上がり、端部で若干外	回転ナデ、指頭	灰N5/	密、微細な長石を多く含む。	1/3	炭素の吸着不十
		碗				反する。高台の断面は逆台形の部分と、逆三	圧	灰N5/	良好		分。
						角形の部分があり、小さい。	回転ナデ、ナデ				
44	SK4	青磁	(15.5)			鎬連弁文、口縁端部は若干外反する。		断面:灰白N7/	極めて緻密	1/10	龍泉窯系。
		碗						釉:緑灰7.5GY6/1	良		
45	SK4	白磁	(15.4)	(1.9)		口縁は大きめの玉縁で、厚手の作りである。	回転ナデ	断面:灰白N8/	密、微砂を含む。	1/8	
		碗					回転ナデ	釉:灰白7.5Y7/2	良好。		
	CIZA	白磁	(17.6)	(1.9)		口縁は大きめの玉縁である。	回転ナデ	断面:灰白N8/	緻密	細片	
46	SK4										

## 遺物観察表3(47~69)

~== ,	77 1270	示火(					i e	T	1		1
No.	出土	器種	法量(	cm)		形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
47	SK4	白磁	(10.9)	(3.1)		口禿の碗で、薄手の作りで、口縁端部は細く	回転ナデ	断面:灰白N8/	緻密	1/5	
		碗				仕上げる。	回転ナデ	釉:灰白10Y7/1	良		,
48	SK4	白磁	(15.9)	(2.8)		口禿の皿で、内面に一条の界線が巡る。外面	回転ナデ	断面:灰白N7/	緻密	細片	
		ш				下端無釉。	回転ナデ	釉:オリーブ灰2.5GY6/1	良		
49	SK4	須恵器	(8.8)	2.7	(5.3)	立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受	回転ナデ、底部	青灰5B6/1	小さい長石を多く含む。	1/4	
		坏身				け部は上外方に開く。	未調整	明青灰5B7/1	堅緻。		
							回転ナデ				
50	SK4	須恵器		(6.3)	9.0	薄く平らな底部から、丸みを持って立ち上が	回転ナデ、ナデ	青灰5B6/1	密、細かい長石,細砂を含む。	底部	底部糸切り
		鉢				  り、上外方へ直線的に開く。	回転ナデ、ナデ	灰N6/	良好。	1/2	東播系か
51	P1	白磁	(8.5)	(2.0)		口禿の碗で、薄い口縁は端部で外反する。		断面:灰白N8/	緻密	1/10	
		碗						釉:灰白7.5GY7/1	良		
52	P2	須恵器		(1.9)	(8.1)	断面逆台形の貼付輪高台の下面は凹線上に	回転ナデ	明青灰5B7/1	密、微細な長石を少量含む。	1/4	
-	-	坏身		(210)	(012)	凹む。高台内へラ削り後ナデ。	回転ナデ	明青灰5PB7/1	堅緻。	1, 1	
53	P3	土師器	7 3	1.4	4.8	短い口縁は内彎気味に立ち上がり、端部で外		橙5YR7/8	密	2/3	
00	. 0	小皿	1.0	1.7	1.0	及い口縁は四号以妹に立ち上かり、場前でた	回転ナデ	橙5YR7/8	良好	2/3	
54	P3 .	土師器	(7.0)	1.3	(5.2)		回転ナデ		密	1/4	
54	Po.		(1.2)	1.3	(5.2)			橙5YR7/8		1/4	
-	DO	小皿	(n 1)	1.0	(0.1)	反する。	回転ナデ	橙5YR7/8	良好 re (m.t.) x E T (th. tmr) d	1./2	ele den de tanto
55	P3	土師器	(7.4)	1.3	(6.1)	平らな底部から、短い口縁が上外方に開く。	回転ナデ	浅黄2.5Y7/3	密、細かい長石,微〜細砂を	1/3	底部糸切り
		小皿				器壁は薄い。	回転ナデ	灰黄2.5Y7/2	含む。		
									良		
56	P3	土師器		(2.0)	(8.0)	平らな底部から、内彎気味に立ち上がる。器	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	密	1/3	底部糸切り
		坏				壁は薄い。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや良		
57	P4	上師器	6.9	1.5	4.2	厚い底部から上外方に立ち上がり、端部は若	ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	細砂を含む。	ほぼ	底部糸切り
		小皿				干外反する。	ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	不良	完形	
58	P4	土師器	(7.0)	1.9	4.2	厚い底部から、上外方へ直線的に開く。小坏	ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	細砂を多く含む。	底部	底部糸切り
		小皿				に近い。	ナデ	浅黄橙10YR8/3	不良	1/2	
59	P5 ·	土師器	(8.4)	1.9	(6.3)	円盤状高台に近い底部から内彎気味に立ち	ナデ	橙7.5YR7/6	細砂を含む。	1/4	
		小皿				上がる。	ナデ	橙2.5YR6/6	不良		
60	P5	土師器	7.4	1.3	4.4	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から上外	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	密	1/2	底部糸切り
		小皿				方へ開き、端部で外反する。器壁は薄い。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	やや良。		
61	P6	土師器	(7.3)	1.5	(5.6)	短い口縁は内彎気味に上外方に開く。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	密、小さい長石、細砂を含	1/3	底部糸切り
		小皿					回転ナデ	赤橙10R6/6	t.		
						·			良好		
62	P6	土師器	(6.9)	1.4	(4.8)	底部から明瞭に境界を持って、短い口縁が直	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	細砂を多く含む。	1/5	底部糸切り
		小皿				線的に上外方に開く。	不明	橙7.5YR7/6	良		
63	P6	土師器	(7.0)	1.4	(5.0)	短い口縁は直線的に上外方に開く。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	密	1/4	
		小皿					回転ナデ	にぶい黄10YR7/3	良好		
64	P6	土師器	(8.0)	1.7	(6.2)	底部から明瞭に境界を持って、短い口縁が直	ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	細砂を多く含む。	1/5	底部糸切り
		小皿				線的に上外方に開く。器壁は薄い。	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良		
65	P6	土師器	(12.7)	3.4	(7.9)		 回転ナデ	浅黄橙10YR8/3	密、微〜細砂を含む。	1/2	底部糸切り
		坏	,,		,,	内彎気味に立ち上がり、端部付近で若干外反		灰白2.5Y7/1	やや良。		
						する。	/				
66	P6	土師器		(3.6)	(7.2)	内彎気味に立ち上がり、端部付近で外反す	同転ナデ	橙5YR7/6	密	1/4	
50		坏		(0.0)	(1.2)	る。器壁は薄い。	回転ナデ	橙5YR7/6	良好	1/4	
67	P7	白磁			点 厶	断面逆台形の高台を削り出す。外面高台付	H44//	灰白2.5GY8/1	緻密	1/4	底部のみ
01	1.1									1/4	あまりつか
co	DO	施				近まで施釉。		灰白7.5Y8/1	良 what	1/4	
68	P8	白磁				断面逆台形の高い輪高台を削り出す。		断面:灰白N8/	緻密	1/4	
20	Do.	碗			(5.8)	_ 43 \ ) + 6% F = 1 \ .   2 \ .   27 \ .	1	釉:明オリーブ灰2.5GY7/1			
69	P9	土師器	7.6	1.4	4.5	口縁は内彎気味に大きく開く。	ナデ	橙5YR7/6	細砂を僅かに含む。	ほぼ	
		小皿					ナデ	橙7.5YR8/8	不良	完形	

## 遺物観察表4(70~91)

				J~9					1		
No.	出土	器種	法量(			形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土		備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
70	P10	土師器	(11.0)	3.5	5.6	平らな底部から上外方へ立ち上がり、端部付	ナデ	橙7.5YR7/6	緻密、細砂を含む。	1/2	底部糸切り
		坏				近で若干外反する。	ナデ	橙5YR6/6	良		
71	P11	青磁		(2.9)		外面に鎬蓮弁文。		断面:灰白N8/	緻密	細片	龍泉窯系。
		碗						釉:オリーブ灰5GY7/1	良		
72	P12	青磁		(1.1)	4.8	見込みに櫛描き文。平らな底部から大きく開		断面:灰白N8/	緻密	1/10	高台なし。
		m				き、口縁付近で上方に屈曲する。		釉:明オリーブ灰5GY7/1	良		同安窯系。
73	P13	青磁	(15.2)	(5.1)		外面に鎬蓮弁文。		断面:灰白N8/	緻密	1/5	龍泉窯系。
		碗						釉;緑灰7.5GY6/1	良		
74	P14	土師器	(10.2)	3.6	(5.6)	やや小振りで、平らな底部から上外方へ直線	回転ナデ	橙5YR7/8	やや密、細かい長石、微〜細	1/3	底部糸切り
		坏				   的に開く。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	砂を少量含む。		
									良好。		
75	P15	土師器	7 9	1.4	5.9	短い口縁は、やや内彎気味に上外方に開く。	回転ナデ	橙5YR7/8	やや密、細かい長石,微〜細	3/4	底部糸切り
	1 10	小皿	1.0	1	0.0	)	回転ナデ	橙2.5YR6/8	砂を含む。		
		1/1/1111					四粒//	142.511(0) 6	良好		
==	54.0	LATER	(1.4.5)		(5.0)		matrix of	Hig EVIDE /C		1 /0	
76	P16	土師器	(14.7)	3.1	(7.8)	底部から上外方へやや大きく開く。口径に比		橙7.5YR7/6	やや密、細かい長石、微~細	1/8	
		坏				して器高がやや低く、器壁も薄め。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	砂を含む。		
									良好。		
77	P17	土師器	(6.5)	1.5	(3.8)	見込みに渦巻状成形痕。底部は厚めで、短	回転ナデ	にぶい橙5YR6/3	密	1/4	底部糸切り
		小皿				い口縁が直線的に上外方に開く。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	良好		
78	P17	石鍋		(4.8)	(26.4)	平らな底部から、上外方に若干内彎して開く。	工具による削り	灰褐7.5YR6/1	滑石製		内外面にスス付着
		(石皿)				現存する口縁端部にも調整痕があり、石鍋破					
						損後皿として二次利用したものと考えられる。					
79	P18	須恵器	16.5	(5.0)	胴 部	胴部は外傾し、肩部で内彎する。端部は丸く	回転ナデ	灰白10Y7/1	やや密、細かい長石、微〜細	1/8	
		鉄鉢			(17.2)	仕上げる。	回転ナデ	灰白7.5Y7/1	砂を多く含む。		
									軟		
80	P19	土師器	(11.4)	3.8	7.6	小振りで、平らな底部から内彎気味に立ち上	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや密、細かい長石を若干、	1/3	
		坏				がり、端部で外反する。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	微〜細砂を少量含む。		
									良好。		
81	P19	瓦質	17 4	(14 4)	11日 部	最大径は、胴部下部にあり口縁は内傾する。	ナデ、指頭圧	灰N5/	密、細かい長石,微〜細砂を	1/4	
01	1 10	三足釜		(1117)	1	口唇は軽く面取り。外面に断面三角形の鍔		断面:灰白N7/	多く含む。		
		->			(55.5)	と、円柱形の三本の脚貼付。			やや不良。		
82	P20	木錘	全長	最大		C. 114Th202—2402haidi110	加工痕不明瞭		( (1)26	-	木製品
04	F20	小姓					7/14 7/15/27 FUR				N-3enn
	D04	1 Accord	13.3	幅4.2		1. 49%		17 2°1 14797 F107 /4	から空 御びたんと。	1/3	
83	P21	土師器	(7.2)	1.5	4.2	内彎して立ち上がり、端部付近で強い指押さ		にぶい橙7.5YR7/4	やや密、微砂を含む。	1/3	
	-	小皿			-	えのため、若干外反する。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好。		
84	P22	土師器	7.7	1.4	5.4	平らな底部から、短い口縁が直線的に上外方		灰白5Y7/1	密、小さい長石,石英、細砂を		
		小皿				に延びる。端部は上から指押さえ。	回転ナデ	灰白5Y8/1	含む。	完形	
		ļ							良好。		
85	P22	瓦器	(7.5)	(1.4)	(6.3)	底部から口縁部にかけ内彎して延びる。	ナデ	灰N7/	密、微細な長石,微砂を含む。	1/3	内型づくり。炭素の
		小皿					ナデ	断面:灰白7.5Y8/1	良		吸着不充分。
86	P23	土師器	7.6	1.9	6.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、短	回転ナデ	橙5YR7/6	密、微細な長石を含む。	完形	底部糸切り
		小皿	L			い口縁が内彎して開く。底面に火膨れ。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	良		
87	P23	土師器	7.9	1.4	5.7	平らな底部から、短く薄い口縁が上外方へ垂	回転ナデ	橙2.5YR6/8	密、微細な長石,石英を含む。	1/2	底部糸切り
		小皿				直に延びる。	回転ナデ	橙2.5YR6/8	良好		
88	P23	土師器	(13.3)	4.5	7.6	高台状の底部から、内彎気味に立ち上がり、	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	密	1/2	
		坏				端部付近で外反する。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	良好。		
89	P23	土師器	(13.7)	3.8	(7.6)	平らな底部から直線的に上外方に開き、端部	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	密、微〜細砂を少量含む。	1/6	底部糸切り
		坏				付近で若干外反する。	回転ナデ	明褐灰7.5YR7/2	良好		
90	P23	土師器	(13.8)	3.7	(8.2)	器壁は薄めで、平らな底部から内彎気味に立		灰黄2.5Y7/2	密	1/4	底部糸切り
"	1.20	坏		0.,	(0.2)	お生な得めて、干らなど前からげるスペに立 ち上がり、端部付近で若干外反する。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好		
01	Doc		-	(0.0)	0.4				密、細かい長石を含む。	1 /0	底部糸切り
91	P23	土師器		(2.2)	8.4	器壁は薄めで、平らな底部から上外方へ開		橙5YR6/8		1/2	PET BISK ALA
		坏		l		<.	回転ナデ	橙2.5YR6/8	良好		

## 遺物観察表5(92~111)

No.	出土	器種	法量(	em)		形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
$\dashv$	P24	土師器		1.5	4.7	平らな底部から上外方へ内彎気味に開く。	回転ナデ	橙2.5YR6/8	密、微〜細砂を含む。		底部糸切り
		小皿		1.0	1	1 2 9 SERTIN 2 7 1 1 3 2 2 2 1 1 1 3 2 2 2 1 1 1 2 2 2 2	回転ナデ	橙2.5YR6/8	良好	完形	) And Hills III you
93	P24	土師器	(13.8)	3 2	8.1	見込みに渦巻状成形痕。器壁は薄く内彎気		にぶい橙7.5YR7/4	密	1/2	
,,	127	坏	(13.0)	0.2	0.1	味に立ち上がり、端部付近で外反する。器高		橙5YR7/6	良好	1,2	
		F1.					四報ノノ	19.51 17.70	TSM.		
	DOF	1.600 8.0	10.7	2.0	6.0	は低い。	matural series	₩£V777 /0		1/4	□ ★ ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1 ★ 1
94	P25	土師器	12.7	3.9	6.3	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎		橙5YR7/8	密、小さい長石を含む。	1/4	底部糸切り
		坏				気味に立ち上がり、薄い端部付近で外反す	四転アア	黄橙7.5YR7/8	良好		
-	DOF	∠ac at = 00		(1.5)	10.0	5.	. = L-#11	m # Espe /s	密、細かい長石を多く含む。	rán vira	
95	P25	須恵器		(1.5)	10.2	平面形はほぼ正円で、上に、外傾する体部が	~>// ^ /	明青灰5B7/1		底部	
96	P26	すり鉢 土師器	(12.0)	2.0	6.0	続くと見られる鉢の底部である。	同転去式	明青灰5B7/1 赤橙10R6/6	堅緻。 のの窓 海畑な見て てまた	完形	ck 文明 公 Film
96	P20		(13.6)	3.0	6.9	見込みに渦巻状成形痕。低い円盤状高台か			やや密、微細な長石,石英を	1/3	成部水 900
		坏				ら内彎して立ち上がり、端部で外反する。器壁	回転ノフ	赤橙10R6/6	若干、微〜細砂を含む。		-
-	DOO	77.00	140	4.0	4.0	は薄め。	== L L	E de la la	良好。	1 (0	出来の四等アナ
97	P26	瓦器	14.9	4.0	4.2	器壁は低く内彎して開く。高台は退化し、小さ		灰白5Y7/1	やや密、微細な長石を多く含	1/8	
		椀				\\ \`\ <sub>o</sub>	回転ナデ	灰白5Y7/1	t.		分。
		LATRO	(10.0)		(= 0)		mesh a b il ma	lmer me (a	良好		
98	P27	土師器	(13.6)	4.2	(7.8)	平らな底部から内鬱気味に立ち上がり、直線	磨滅のため不明	橙5YR7/6	細か~中砂を含む	1/4	
_		坏				的に上外方に開く。		浅黄橙7.5YR8/4	不良		
99	P28	土師器	(15.2)	4.4	(9.2)	見込みに渦巻状成形痕。底部から内彎気味		橙5YR7/6	密、微細な長石,微砂を少量	1/3	
		坏				に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4 	含む		指頭圧によりゆが
					<u> </u>				良好		tr.
100	P29	土師器	12.7	3.9	7.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、内	回転ナデ	橙5YR7/6	密、微細な長石,微砂を少量	1/2	
		坏				乱気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	橙5YR6/6	含む		
_				-					良好		
101	P29	土師器	(13.8)	3.5	7.6	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎	回転ナデ	橙5YR6/6	やや密、微細な長石,微〜細	1/3	
		坏				気味に立ち上がり、端部で外反する。器高は	回転ナデ	橙5YR7/8	砂を含む。		
						低め。			良好		
102	P29	土師器	(15.1)	3.5	9.0	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、内	回転ナデ	橙5YR6/6	やや密。	2/3	
		坏				彎気味に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	橙7.5YR7/6	良好		
103	P29	土師器	(14.4)	4.2	7.0	平らな底部から、ほぼ直線的に立ち上がり、	回転ナデ	赤橙10R6/6	やや密、細かい長石,石英、微	1/3	底部糸切り
		坏				端部で外反する。	回転ナデ	にぶい赤橙10R6/4	〜細砂を含む。		
									良好		
104	P29	土師器		(2.4)	8.4	平らな底部から、内彎気味に立ち上がる。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	密、微細な長石を若干含む。	1/4	底部糸切り
-		坏			ļ		回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	良好		
105	P29	土師器	(12.4)	3.2	(8.0)	見込みに渦巻状成形痕。小振りで、平らな底	回転ナデ	橙7.5YR7/6	密。	1/3	底部糸切り
		坏				部からほぼ直線的に上外方に開く。器壁は薄	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/6	良好		
						め。		-			
106	P29	土師器	14.6	3.8	9.2	見込みに渦巻状成形痕。底部からほぼ直線	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	密、小さい長石、細砂少量を	1/4	底部糸切り
		坏				的に立ち上がり、端部で外反する。	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	含む。		
									良好		
107	P29	土師器	14.3	4.1	8.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部からほぼ	回転ナデ	にぶい黄橙5YR7/4	密	2/3	底部糸切り。平面型
		坏				直線的に上外方に開く。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好		は大きくゆがむ。
108	P29	須恵器		(5.4)	16.8	外面は平高台気味の底部からほぼ直線的に	板ナデ	青灰10BG5/1	密、細かい長石、微砂を多く	底部	
		甕				上外方に開く。内面は、底部と体部の境界が	ナデ	明青灰5PB7/1	含む。	1/2	
						はっきりせず、底部内面に凹みを形成する。			堅緻		
109	P30	土師器	14.6	4.3	7.4	見込みに渦巻状成形痕。微かな円盤状高台	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	密	3/4	底部糸切り
		坏				を持つ底部から、内彎して立ち上がり、端部付	回転ナデ	淡黄2.5Y8/3	良好		
						近で外反する。					
110	SD1	土師器	(7.4)	1.4	(4.8)	短い口縁は若干外反して上外方に開く。器壁	回転ナデ	にぶい橙5YR6/4	密	1/6	
		小皿				は薄め。底部との境界は明瞭。	回転ナデ	橙2.5YR6/6	良好		
111	SD1	土師器	7.7	1.6	5.4	見込みに渦巻状成形痕。短い口縁はほぼ直	回転ナデ	黄橙7.5YR8/8	密	2/3	
		1		I	1		1	I		l	I

## 遺物観察表6 (112~136)

. 1	出土	DD 54	54- EL. (	``		mide the	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	<b></b>
NO.	'	<b>吞</b> 作里	法量(6		ptr /77	形態・施文					ν <del>π</del> ν <del>σ</del>
	箇所	1		器高	底径	125 - 42 30 1 pt 10 - 1 0 200 3 - 11 1 2 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	(内面)	(内面)	焼成	率(6	
.12	SD1	土師器	(8.0)	1.4	(6.5)	短い口縁が、上外方に小さく開く。底部との境		にぶい橙7.5YR7/4	密、微砂を含む。	1/6	
		小皿				界は明瞭。	回転ナデ	浅橙(5YR8/4	良好		
13	SD1	土師器	(8.1)	1.4	(5.5)	口縁は直線的に大きく開く。底部との境界は	回転ナデ	橙5YR7/6	密、微細な長石を若干含む。	1/3	
		小皿				明瞭で、器壁は薄め。	回転ナデ	橙5YR7/8	良好		
114	SD1	土師器	(7.3)	1.4	(4.9)	短い口縁は直線的に上外方に開く。器壁は	回転ナデ	灰黄褐10YR6/2	密	1/4	底部糸切り
		小皿				薄め。	回転ナデ	灰黄褐10YR6/2	良		
115	SD1	土師器	(7.5)	1.2	(5.4)	短い口縁は、やや内彎して上外方に開く。	ナデ	橙7.5YR8/6	細砂を僅かに含む。	1/6	
		小皿					ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	不良		
116	SD1	土師器	(8.3)	1.6	(6.1)	口縁はやや内彎して上外方に開く。	回転ナデ	浅黄橙10YR8/3	密	1/4	
		小皿					回転ナデ	灰N5/	やや良		
117	SD1	土師器	(8.2)	1.2	(5.7)	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、内	回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	密、微細な長石を少量含む。	1/3	底部糸切り
		小皿				   彎気味に立ち上がり、口縁が外反する。	回転ナデ	褐灰10YR6/1	やや不良		
118	SD1	土師器	(7.4)	1.5	5.9	平らな底部から、短い口縁が直線的に上外方		橙5YR7/6	密	1/2	底部糸切り
	0.01	小皿	(1/		0.0	へ小さく開く。	回転ナデ	橙5YR7/8	良好		
110	SD1	土師器	(0.5)	1.4	(7.4)	短い口縁が直線的に上外方へ開く。	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	密	1/4	底部糸切り
119	PDI		(9.5)	1.4	(7.4)	だい口稼が巨級印ルニグトガへ開く。		横5YR7/6		1/4	TEZ EID NY 9079
		小皿					回転ナデ		良好		
120	SD1	土師器	(6.5)	1.4	(4.6)	短い口縁が内彎して上外方に開く。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	密、微砂を含む。	1/4	
		小皿					回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	良好		
121	SD1	土師器	(7.7)	1.1	(6.2)	平らな底部から、非常に小さい口縁が内彎し	ナデ	橙5YR7/4	緻密、0.5mm大以下の砂粒を	1/5	
		小皿				て立ち上がる。	ナデ	橙5YR7/4	僅かに含む。		
									不良		
122	SD1	土師器	(8.5)	1.3	(5.2)	口縁は内彎しながら大きく開く。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	密	1/4	
		小皿		-			回転ナデ	淡橙5YR8/3	良好		
123	SD1	土師器		(1.3)	(9.0)	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	密、微細な長石を若干含む。	1/2	底部糸切り
		坏		-		気味に立ち上がる。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好		
124	SD1	土師器		(2.1)	(10.2)	底部から、ほぼ直線的に立ち上がる。	回転ナデ	褐灰7.5YR5/1	密	1/4	底部糸切り
		坏					回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや不良		-
125	SD1	瓦器	(15.0)	3.6	4.1	小さい断面逆台形の高台を貼付する。体部は	ナデ、指頭圧	暗灰N/3	密、細かい長石を多く含む。	1/4	炭素の吸着不充
		椀	, ,			内彎して大きく開き、器高は低い。	ナデ、ヘラミガキ	灰白5Y7/1	良好		
126	SD1	-	(20.7)	(6.9)		外面に鍔を貼付後、脚を貼付する。口縁は少		灰N5/	中砂を多く含む。長石が目立	1/10	
120	JD1	三足釜	(20.1)	(0.0)		し内傾し、胴部最大径は鍔の少し下にある。	ナデ、指頭圧、	暗灰N3/	2.	-,	
		一定玉					ハケ	PHDCING/	良		
	00.4	cer-t-no	(10.1)	(4.0)		口唇は軽く面取りする。		nu de recepe /s		1 /10	-
127	SD1	須恵器	(12.1)	(1.9)		立ち上がりは少し内傾し、端部は丸く仕上げ		明青灰5B7/1	密、微細な長石を含む。	1/12	
		坏身				る。短い受け部はほぼ水平に延びる。	回転ナデ	明青灰5B7/1	堅緻		
128	SD1	須恵器		(1.5)		短い立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げ	ナデ	灰N5/	緻密、細砂を多く含む。	細片	
		坏身				る。短い受け部は水平に延びる。	ナデ	灰N6/	良		
129	SD1	須恵器		(3.0)	(8.6)	小さめの底部から若干内彎して立ち上がる。	ナデ	灰白N7/	緻密、中砂を多く含む。	1/16	底部糸切り
		鉢					ナデ	灰白N7/	良		東播系
130	SD1	須恵器	(24.7)	(4.3)		口縁は外傾してほぼ直線的に開き、口唇は面	ナデ	青灰5PB6/1	やや粗。中砂を含む。	細片	東播系
		鉢				取りして少し上下に拡張する。	ナデ	青灰5PB6/1	良		
131	SD2	土師器	(6.4)	0.6	(4.0)	薄手の作りで、口縁は外傾して大きく開く。	回転ナデ	橙5YR7/6	密	1/4	底部糸切り)
		小皿					回転ナデ	橙5YR7/8	良好		
132	SD2	土師器	(6.3)	1.2	(5.2)	円盤高台状の底部から、短い口縁が上外方	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	密	1/3	底部糸切り
		小皿			`	に大きく開く。	回転ナデ	にぶい橙5YR6/4	良		
133	SD2	土師器	7.5	1.9	5.2	短い口縁は、上外方へほぼ直線的に開く。見		橙5YR6/8	密	完形	底部糸切り。平面
_ 50	000	小皿				込みに火膨れ。底部と口縁の境界は明瞭。	回転ナデ、ナデ	橙7.5YR7/6	良好	1	は大きくゆがむ。
194	cDo		7.6	1.6	5.4			灰白10YR8/2	密	2/3	底部糸切り)
134	SD2	上師器	0.1	1.6	5.4	短めの口縁は上外方へほぼ直線的に開く。	回転ナデ		-	2/3	M2-EP/K 9/19/
		小皿				頸部と口縁との境界は明瞭。	回転ナデ	灰白10YR8/2	良好		principles of them?
135	SD2	土師器	7.7	1.5	5.5	短めの口縁は上外方へほぼ直線的に開く。	回転ナデ	灰白2.5Y7/1	やや密		底部糸切り
		小皿				頸部と口縁との境界は明瞭。	回転ナデ	灰白2.5Y7/1	良好	完形	
136	SD2	土師器	7.6	1.4	5.9	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から短い	回転ナデ	浅黄橙10YR8/4	密	ほぼ	底部糸切り

## 遺物観察表7 (137~158)

No	出土	<b>吳</b> 稱	法量(	cm)		形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	难左	備考
INO.	箇所	4001里	口径	器高	底径	加速。他又	(内面)	(内面)	焼成	率	UH 45
107		1. 60 RP				信味の口包は、1577才伯仲171月十75日/					ricitor de Janie
137	SD2	土師器	1.1	1.5	5.8	短めの口縁は、ほぼ直線的に上外方に開く。	回転ナデ	橙7.5YR7/6	密		底部糸切り
	200	小皿	(= 0)		<i>5</i> 0	口縁の器壁は薄い。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好	完形	
138	SD2	上師器	(7.8)	1.5	5.6	平らな底部から、口縁は直線的に上外方に開		にぶい橙5YR7/4	密、微〜細砂を含む。	3/4	
		小皿				く。口縁の器厚は薄め。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	良好		
139	SD2	土師器	8.3	1.5	6.1	平らな底部から、短めの口縁がほぼ直線的に 		灰白10YR8/2	密、微砂を含む。	3/4	底部糸切り
		小皿				上外方に開く。口縁の器壁は薄め。	回転ナデ	灰白2.5Y8/1	良好		
140	SD2	土師器	8.2	1.5	6.2	平らな退部から、口縁が上外方へ直線的に開		浅黄橙10YR8/4	密、微細な長石,微〜細砂を	3/4	底部糸切り
		小皿				く。口縁の器壁は薄め。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	含む。		
									やや良		
141	SD2	土師器	8.3	1.4	6.1	平らな底部から、短めの口縁が内彎して立ち	回転ナデ	橙5YR7/6	密	3/4	底部糸切り
		小皿				上がる。口縁の器壁は薄め。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好		
142	SD2	土師器	8.4	1.4	6.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、内	回転ナデ	橙2.5YR6/8	密、細かい長石,微〜細砂を	3/4	底部糸切り
		小皿				彎気味に薄めの口縁が立ち上がる。	回転ナデ	橙2.5YR6/8	含む。		
									良好		
143	SD2	土師器	(7.7)	1.4	(6.0)	平らな底部から、短めの口縁が内彎して立ち	回転ナデ	橙5YR7/6	密、微細な長石を若干含む。	1/3	底部糸切り
		小皿				上がる。	回転ナデ	橙7.5YR7/6	良好		
144	SD2	土師器	(7.8)	1.1	(6.4)	非常に短い口縁が、やや内彎気味に大きく開	回転ナデ	灰白2.5Y7/1	やや密	1/3	底部糸切り
		小皿				<	回転ナデ	灰白2.5Y7/1	良		-
145	SD2	土師器	(8.0)	0.9	6.4	非常に短い口縁が、上外方へ大きく開く。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	やや密	1/2	底部糸切り
		小皿					回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	良好	ľ	
146	SD2	土師器		(1.5)	7.8	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から、直		にぶい橙7.5YR7/4	密、微〜細砂を含む。	1/3	底部糸切り
		坏		(110)		線的に上外方に開く。	回転ナデ	橙5YR7/6	良好	1,0	MSCHOOL SO
147	SD2	土師器		(1.9)	8.7	平らな底部から、明瞭に境界を持って直線的		褐灰7.5YR6/1	やや密、微細な長石,石英、微	1/3	店郊乡田り
141	302	坏		(1.3)	0.7	に立ち上がる。	回転ナデ	褐灰10YR6/1	~細砂を多く含む。	1/3	医前来909
		J				(こエラエル・る。	四极//	PG/X 101 NO/ 1			
1.40	SD2	土師器		(1.3)	9.0	TO No Programme 1 Market 1987	回転ナデ	Letter me /o	密	1./0	Pleater de Limite
140	3D2			(1.3)	9.0	平らな底部から、上外方に開く。		橙5YR7/6		1/2	底部糸切り
	an a	坏					回転ナデ	橙5YR7/6	良好		dada 6 (a)
149	SD2	土師器	13.7	4.6	8.0	見込みに渦巻状成形痕。底部からほぼ直線		浅黄橙10YR8/4	密、微〜細砂を含む。	1/3	底部糸切り
		坏				的に上外方に開く。口縁の器壁は薄め。	回転ナデ	にぶい橙5YR7/4	良好		
150	SD2	土師器	(15.3)	3.6	9.4	平らな底部から内彎気味に立ち上がり、端部		橙5YR7/6	密、微から細砂、微細な長石	1/2	底部糸切り
		坏				で少し外反する。	回転ナデ	橙5YR7/8	を少量含む。		
									良好		
151	SD2	瓦器	8.8	1.5	4.6	底部から口縁にかけて内彎して開く。器壁は	ナデ	灰N4/	密、微細な長石,微砂を含む。	1/2	
		小皿				厚い。見込みにジグザグの暗文が入る。	ナデ、暗文	灰N4/	良		
152	SD2	瓦器	(11.4)	(3.3)		小振りで、小振りで内彎気味に開き、器高も低	ナデ、指頭圧	灰N5/	緻密	細片	
		椀				め。内面に横方向の暗文が入る。	ナデ、暗文	灰N5/	良		·
153	SD2	瓦器	(14.6)	(3.2)		器高は低く、口縁は大きく開き皿に近い。内	ナデ、指頭圧	灰白5Y8/1	緻密	細片	炭素の吸着が不十
		椀				面に横方向を主体にした暗文が入る。		灰白7.5Y8/1	良		分
154	SD2	須恵器		(4.7)	9.4	底部から直線的に上外方に延びる。	回転ナデ、ナデ	灰N5/	やや密、細かい長石,微〜細	2/3	底部に、布目状の
		鉢					回転ナデ、ナデ	灰N5/	砂を多く含む。		圧痕あり。
									堅緻。		
155	SD2	土師器	(8.4)	1.4	(6.9)	平らな底部から、短い口縁が直線的に上外方	ナデ	灰白7.5YR8/2	緻密、中砂を含む。	1/3	底部糸切り
		小皿				へ延びる。	ナデ	灰白7.5Y8/1	不良		
156	SD2	土師器	(11.6)	3.3	(5.3)	非常に低い円盤状高台を持つ底部から、内	回転ナデ	橙5YR6/8	やや密、微〜細砂を含む。	1/2	底部糸切り
		坏					回転ナデ	橙5YR6/8	良好	-	
157	SD2	土師器	(12.0)	3.8	(6.4)	見込みに渦巻状成形痕。器壁の薄い底部か		橙7.5YR7/6	中砂を多く含む。	底部	
	-	坏	. =. •/		/	ら内彎して立ち上がり、端部付近で少し外反		橙5YR7/8	不良	完形	
		1					( )	MOTAL, O	114	ノレバシ	
150	SD0	上海町中	(14.0)	4.0	0.9	する。	同転士ご	#\$9 EVD7 /0	かめ你 (man)ナーヘル	1 /4	हिंद ऐस रहे 14110
198	SD2	土師器	(14.0)	4.0	8.2	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎		橙2.5YR7/8	やや密、細砂を含む。	1/4	底部糸切り
		坏				して立ち上がり、端部にかけて緩やかに外反	回転ナデ	橙2.5YR7/8	良好		
						する。					

## 遺物観察表8 (159~180)

		宗 久(						[			
No.	出土	器種	法量(			形態・施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土		備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
159	SD2	土師器	(15.2)	3.3	(8.2)	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎	ナデ	浅黄橙10YR8/4	中砂、粗砂を多く含む。	1/3	
		坏				して立ち上がり、端部で大きく外反する。器壁	ナデ	にぶい褐7.5YR6/3	不良		
	-					は薄めで、器高は低い。					
160	SD2	土師器	(14.8)	2.9	7.9	見込みに渦巻状成形痕。平らな底部から内彎	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	密、小さい長石,微砂を若干含	1/2	底部糸切り後布目
		坏(皿)				気味に立ち上がり、口縁で大きく外反する。器	回転ナデ	橙5YR7/6	t.		圧痕
						高は非常に低い。			良好		
161	SD2	青磁		(3.1)		わずかに内彎しながら開く。内面に櫛描文及		断面:灰白N8/	緻密	細片	龍泉窯系
		碗				びヘラ描文。端部に界線を施す。		釉:オリーブ灰7.5Y5/2	良		
162	SD2	青磁	13.4	(3.1)		わずかに内彎しながら開く。内面に櫛描きによ		断面:灰白N7/	緻密	1/5	同安窯系
		碗				るジグザグ文、端部に界線、外面に縦方向の		   釉:明オリーブ灰2.5GY7/1	良		
						櫛描文を施す。					
163	SD2	瓦器	14.7	(3.9)		底部から内彎して開く。内面体部には円周方	ナデ、指頭圧	灰N5/	良	1/2	高台剥落、焼成時
		椀		(5.57		向、見込みには平行な暗文を施す。	ナデ、暗文	灰N4/	緻密		のゆがみが大きい。
164	SD2	瓦質	18.2	(2.8)		口縁は内傾し、端部は軽く面取り、外面に小		灰N4/	中砂を多く含む。とりわけ雲母	1/10	
101	502	羽釜	10.2	(2.0)		さい鍔を貼付する。	ナデ	灰N4/	を多く含む。良	.,	
165	SD3	土師器	0.0	1.5	6.0	平らな底部から短い口縁が内彎気味に開く。	回転ナデ	橙2.5YR6/8	やや密、小さい長石,微〜細	3//	序部糸切り
100	ასა		0.0	1.5	0.0		回転ナデ		砂を少量含む。	3/ 1	ASCHON 909
		小皿				端部の器壁は薄い。	四転ノフ	橙2.5YR6/6			
		1 475 00					1	Livery may (o	良好	1 /0	
166	SD3	土師器	6.9	1.5	5.4	平らな底部から明瞭に境界を持って直線的に		橙5YR6/8	中砂を多く含む	1/3	
		小皿				上外方に開く。	ナデ	橙2.5YR6/8	良		data to to to
167	SD3	土師器	7.7	1.4	5.4	平らな底部から短い口縁がほぼ直線的に上		浅黄橙7.5YR8/4	やや密、細かい長石,微砂を		底部糸切り
		小皿				外方に開く。端部の器壁は薄い。 	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	含む。	完形	
									良好		
168	SD3	白磁	(7.6)	(2.2)		口禿の小型皿で、口縁下部で大きく上方へ屈		断面:灰白10Y8/1	緻密	1/10	
		Ш				曲する。		釉:明オリーブ灰2.5GY7/1	良		
169	SD3	白磁		(1.6)	(6.6)	畳付部分のケズリ出しが少なく、高台幅は広		断面:灰白N8/	緻密	1/10	
		碗				い。外面は、残存部の外面は全て無釉。		釉:灰白10Y7/1	良		
170	包含	須恵器		(1.6)		扁平な天井部から下方へ屈曲して下がり、後	回転ナデ	灰N/6	密	1/6	天井部、口縁部の
	2層	坏蓋				に外反する。口縁端部は下方に屈曲する。	回転ナデ	明青灰5PB7/1	堅緻		一部に自然釉
171	包含	土師器	(6.7)	1.4	(5.5)	平らな底部から、明瞭な境界をもって、短い口	ナデ	淡赤橙2.5YR7/4	中砂・粗砂を含む。	1/4	底部糸切り
	2層	小皿				縁が上外方に延びる。	ナデ	にぶい橙5YR7/4	不良		
172	包含	瓦器	(8.0)	(1.6)	(3.2)	底部から口縁部にかけて、内彎しながら開く。	ナデ、指頭圧	灰N4/	密	1/6	炭素吸着。和泉型、
	2層	小皿					ナデ	灰N4/	良		型作りで成形
173	包含	瓦器	(14.7)	4.2	(3.6)	底部から内彎して開き、端部で若干外反す	回転ナデ、指頭	灰N6/	やや密、微砂を含む。	1/8	炭素の吸着不十
	2層	椀				る。断面三角形の輸高台を貼付する。	圧、ナデ	灰N6/	良好		分。
							回転ナデ				
174	包含	瓦質	(21.5)	(3.8)		土師質と瓦質の中間的な焼成で、口縁はあま		淡黄2.5Y8/3	やや密、微細な長石,石英、微	1/10	十師質に近い。
	2層	羽釜	(21,0)	(0.0)		り内傾せず、端部は軽く面取りする。	ナデ	灰白N7/	〜細砂を含む。		
	2/11	11 III				· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	, ,		良好		
175	50	r'-s 79f-	साम्ब्र नेतार	(0.7)		内傾する肩部から頸部が直立する。付け根の	同志士学	断面:灰白10Y8/1	緻密	1/19	176と同一個体か
175	包含	白磁	頸部	(3.7)						1/12	1102回 回体25*
	2層	四耳壺	(8.5)	(1>		内面に凹線を巡らす。	回転ナデ	釉:明オリーブ灰2.5G	良 (c),ctr	1 /0	1251.00 /0/4-1
176	包含	白磁		(4.1)		外傾する胴部下部で、内面に工具痕が残る。	回転ナデ	断面:灰白10Y8/1	緻密	1/8	175と同一個体か
	2層	四耳壺			1		回転ナデ	釉:明オリーブ灰2.5GY7/1			
177	包含	白磁		(3.1)	(8.6)	外面下半及び内面見込み釉ハギ。見込み外		断面:灰白N8/	緻密	1/2	
	2層	碗	-			施釉部分に界線が巡る。	回転ナデ	釉:灰白10Y7/1	良	0	
178	表採	青磁	体部	(2.2)		体部で大きくくびれる。口縁に近い部分と思		断面:灰白N8/	緻密	細片	
		ш	(12.2)			われる。		釉:明オリーブ灰2.5GY7/1	良		
179	包含	青磁	(11.6)	(3.4)		ほぼ直線的に上外方に開く。		断面:灰N7/1)	緻密	細片	
	2層	碗						釉:緑灰(7.5GY6/1)	良		
				1	1				緻密	1/10	龍泉窯系
180	包含	青磁	(15.8)	(2.5)		口縁端部内外面下に界線。内面に草花文を		断面:灰白N7/	拟在	1/10	HEAVAMAN

## 遺物観察表9 (181~203)

/2Z.	_		Ι'		203			T	1		Г.
No.	出土	器種	法量(	em)		形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
181	包含	青磁		(1.6)	3.2	断面三角形の小さい高台をケズリ出す。		断面:灰N8/	緻密	4/5	
	2層	小碗						釉:青灰5BG6/1	良		
182	包含	青磁		(2.9)		外面に鎬蓮弁文		灰白N8/	密、微砂を含む。	細片	龍泉窯系
	2層	碗						緑灰7.5GY6/1	良好		
183	包含	青花		(2.3)	(3.1)	内面無文、体部に草花文。畳付を含めほぼ全		灰白N8/	密、微砂を含む。	底部	
	2層	小椀				面に施釉する。		灰白5GY8/1	良好		
184	包含	陶器	(22.9)	(4.2)		軽く内彎し、口唇は面取り、玉縁状に肥厚さ	回転ナデ	赤灰2.5YR4/1	密、微細な長石,微砂を含む。	1/6	
	2層	鉢				せる。	回転ナデ	灰釉	良好		
185	包含	土師器	(6.3)	1.4	4.5	底部から明瞭に境界を持って開き、端部で若	回転ナデ	にぶい橙2.5YR6/4	密	1/3	底部糸切り
	3層	小皿				干外反する。	回転ナデ	にぶい赤橙2.5YR5/4	やや良		
186	包含	土師器	(6.9)	1.6	(5.2)	平らな底部から直線的に上外方に開く。	ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	中砂を僅かに含む。	1/4	底部糸切り
	3層	小皿					ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	良		
187	包含	土師器	(7.1)	1.4	(5.0)	底部がら内彎して上外方に開く。端部の器壁	回転ナデ	橙2.5YR7/8	密、微細な長石,微〜細砂を	1/6	
	3層	小皿				は薄い。	回転ナデ	赤橙10R6/8	含む。		
									良好		
188	包含	土師器	(6.9)	1.4	(4.6)	底部からほぼ直線的に上外方に開く。口縁の	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	密	1/4	底部糸切り
	3層	小皿			.	器壁は薄め。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	良好		
189	包含	土師器	7.3	1.6	5.3	平らな底部から短い口縁が若干外反気味に		にぶい橙7.5YR7/3	密	2/3	底部糸切り
	3層	小皿				上外方に開く。	回転ナデ	灰黄2.5YR6/1	やや良		
190	包含	土師器	7.9	1.1	5.7	平らで厚い底部から、非常に短く薄い口縁		橙2.5YR6/6	中砂を含む。	ほぼ	底部糸切り
100	3層	小皿				が、直線的に上外方に開く。	, ,	橙5YR6/6	良	完形	
191	包含	土師器	7.6	1.4	6.3	短い口縁が直線的に上外方に開く。全体的	回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	密		底部糸切り
101	3層	小皿	1.0	1.1	0.5	に器壁は薄い。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	良好	完形	MESTRON 937
102	包含	土師器	(7.0)	1.6	5.6	厚い底部から、薄い口縁がほぼ直線的に上		浅黄橙7.5YR8/4	密	1/2	底部糸切り
132	3層	小皿	(1.5)	1.0	5.0	外方に開く。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	良好	17.2	ACCEPTANT 93.9
102	包含	土師器	7 0	1.2	4.8	見込みに渦巻状成形痕。短く薄い口縁がや		にぶい黄橙10YR7/4	密、小さい長石、微〜細砂を	在:	序部糸切り
155	3層	小皿	1.5	1.2	4.0	や内彎して大きく開く。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	含む。	2/3	ACEDAN 909
	3/ <u>m</u>	\1.TIII				(FIGUENA)	HA / /	CSA SCHEIDING/2	良好	2,0	
104	包含	土師器	0 2	1.5	6.6	短い口縁がほぼ直線的に上外方に開く。	回転ナデ	橙7.5YR7/6	密、小さい長石、細砂を少量	1414	底郊 A 把N
134	3層	小皿	0.3	1.5	0.0		回転ナデ	橙7.5YR7/6	を含む。	完形	E 10 × 90 9
	3/雪	7111111					回報//	15.7.511(7/0	やや良	פונשל	-
105	包含	土師器	(C 0)	1.9	4.5	底部から、明瞭に境界を持って開き、端部で	同転士デ	橙7.5YR7/6	密	1/2	底部糸切り
190		小坏	(6.0)	1.9	4.5		回転ナデ	橙7.5YR7/6	やや良	1/2	METHON 30.0
106	3層	土師器	C 4	1.0	4.2	若干外反する。 		浅黄橙7.5YR8/6	粗。中砂を含む。	1/3	
			0.4	1.8	4.2		始級のためかり			1/3	
_		小坏		(1.0)	-	く。端部の器壁は薄め。	口机上当	浅黄橙7.5YR8/4	不良	0 /0	DEC ALL AS TELLIFO
197		土師器		(1.8)	5.4	見込みに渦巻状成形痕。非常に低い円盤状		橙7.5YR6/6	密	2/3	底部糸切り
100		坏土無器		(4.0)	5.6	高台から内彎気味に開く。 低い円盤状高台から、内彎気味に開き、後に	回転ナデ	橙7.5YR6/6	良好密	1/2	
198		土師器		(4.0)	5.6			橙5YR6/6		1/2	
100	3層	坏业	(10.0)	4.5	(0.5)	外反する。口縁の器壁は薄い。	同志士ご	浅黄橙7.5YR8/4	良好	1 /0	
199	包含	土師器	(13.3)	4.0	(6.5)	低い円盤状高台から内彎気味に開き、端部		橙5YR7/8	密	1/3	
000	3層	坏	(15.0)	2.0	(0.0)	付近で若干外反する。口縁の器壁は薄め。	回転ナデ	橙5YR7/8 压白2.5V8/2	おお恋 長石 石英 細砂な	1 /4	
200		土師器	(15.0)	3.9	(8.8)	円盤高台状の底部から内彎気味に立ち上が		灰白2.5Y8/2	やや密、長石、石英、細砂を	1/4	
	3層	坏				り、端部で外反する。	回転ナデ	灰黄2.5Y7/2	含む。		], 
06-	50	LATER		(0.0)		E 11 7 17 18 16 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	m#.1-~	) - )*) , # [# o m o / ·	やや良	0./0	中 本 4 m 2
201		土師器		(2.8)	6.1	見込みに渦巻状成形痕。平らな口縁から内彎		にぶい黄橙10YR7/4	やや密、微細な長石,微砂を	2/3	広部米切り
	3層	坏				して開く。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4 	少量含む。		
									良好		
202		土師器	(11.2)	3.4	(6.7)	やや小振りで、平らな底部から上外方に開		にぶい橙7.5YR7/4	中砂を多く含む	1/5	
	3層	坏				き、端部付近で若干外反する。	ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	不良		
203		土師器	(12.5)	4.6	6.4	見込みの渦巻状成形痕をナデ消し。平らな底		浅黄橙7.5YR8/4	密	2/3	底部糸切り
	3層	坏				部から内彎気味に開き、口縁で外反する。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	やや良		

## 遺物観察表10 (204~224)

<u>بحر</u>						7		1	Υ		1
No.	出土	器種	法量(c	em)		形態·施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
204	包含	土師器	(13.2)	2.9	(8.8)	高台状の底部から上外方へ直線的に開く。器	ナデ	橙5YR7/6	中砂を含む。長石,石英が目	1/6	一段目の粘土帯の
	3層	坏				高は低く、器壁は薄め。	ナデ	浅黄橙7.5YR8/6	立つ。		貼付で高台を作出
						•			不良		す。
205	包含	土師器	(12.9)	3.2	(6.3)	外面が凹んだ底部から内彎気味に立ち上が	回転ナデ	橙5YR6/8	密、微細な長石を少量含む。	1/3	
	3層	坏				り、ほぼ直線的に開く。	回転ナデ	橙5YR6/8	良好		
206	包含	土師器	(13.1)	3.7	(8.4)	底部から直線的に上外方に開き、端部で若干	回転ナデ	灰白7.5YR8/2	中砂を含む。長石,石英が目	1/5	底部糸切り。
	3層	坏				外反する。	回転ナデ	灰白5YR8/1	立つ。		
	_	,							やや不良		
207	包含	土師器		(2.1)	(8.8)	平らな底部から上外方に開く。	回転ナデ	橙5YR7/6	密、微細な長石を含む。	1/4	
.01	3層	坏		(2.1)	(0.0)	1 Sakatiw STANICING	回転ナデ	橙2.5YR6/6	良好	., .	
200			(10.1)	4.0	c 0	さかよう 内部 シフ目も 押かけ につりにす				1 /0	
208	包含	土師器	(13.1)	4.0	6.8	底部から内彎して開き、端部付近で外反す		橙5YR6/6	密、微〜細砂を含む。	1/2	底部糸切り
		坏				る。口縁の器壁は薄い。	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや良		
209	包含	土師器	(13.6)	4.6	6.4	平らな底部から、直線的に上外方へ開く。 	回転ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや密、細かい長石、微〜細	1/3	
	3層	坏					回転ナデ	灰黄2.5Y7/2	砂を少量含む。		
									良		
210	包含	土師器	(13.7)	3.8	(7.1)	底部から内彎気味に開き、端部で若干外反	回転ナデ	橙5YR7/6	密	1/3	
	3層	坏				する。口縁の器壁は薄い。	回転ナデ	橙5YR7/6	良好		
211	包含	土師器	(14.2)	3.6	(8.6)	見込みに渦巻状成形痕。底部から内彎気味	ナデ	橙7.5YR7/4	中砂を含む。	1/3	
	3層	坏				に立ち上がり、端部付近で若干外反する。	ナデ	橙7.5YR7/3	不良		
212	包含	須恵器	(12.2)	(3.0)		立ち上がりは内傾し、端部は摩滅。短い受け	回転ナデ	灰白7.5Y7/1	密、細かい長石、微砂を多く	1/6	土師質
	3層	坏身				  部はほぼ水平に延びる。	回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	含む。	;	
									軟		
213	包含	須恵器		(1.7)	(9.4)	底部に小さい輪高台を貼付する。	回転ナデ	明青灰5B7/1	密、微細な長石を少量含む。	1/6	
	3層	坏身					回転ナデ	明青灰5PB7/1	堅緻		
914		須恵器	(25.1)	(4.5)		口縁は直線的に上外方に開き、口唇は斜め			密、細かい長石、微砂を含	1/12	
214		片口鉢	(20.1)	(1.0)		に面取りして上方に拡張する。	デ、指頭圧	明青灰5PB6/1	t.	1/12	
		刀口呼				で国政がして上がでかれまる。		91 H JX 31 D0/ 1	堅緻		
015		/w	05.5	(0, 1)			回転ナデ、ナデ	#EFFCODA (1		1 /10	
215		須恵器	25.5	(2.4)		口縁は大きく上外方に開き、端部を上方につ		青灰5PB6/1	密、微細な長石,微〜細砂を	1/10	
	3層	盤				まむ。 	回転ナデ	青灰5PB6/1	少量含む。		
									堅緻。		
216	包含	瓦器	(8.1)	(1.7)	(6.4)	底部から口縁にかけて内彎して開く。見込み	ナデ、指頭圧	灰N6/	緻密	1/5	
	3層	小皿				に暗文が残る。	ナデ	灰N6/	良		
217	包含	瓦器	(8.7)	(1.3)	(7.2)	底部から口縁にかけて内彎して開く。横ナデ	ナデ、指頭圧	灰N4/	中砂を多く含む。	1/5	
	3層	小皿				の口縁部と底部との境界が非常に明瞭。	ナデ	灰N4/	不良		
218	包含	瓦器	(14.0)	(3.9)		底部から口縁にかけて内彎して開く。内面見	横ナデ、指頭圧	灰白10YR8/2	緻密	1/5	炭素の吸着がやや
	3層	椀		į		込み部は平行、体部は横方向に暗文が残る。	ナデ	灰N4/	良		不十分。
219	包含	瓦器	(13.8)	3.5		底部から口縁にかけて内彎して開く。内面見	横ナデ、指頭圧	灰白5Y7/1	緻密、細砂を含む。	1/8	外面は炭素の吸着
	3層	椀				込み部は平行、体部は横方向に暗文が残る。	ナデ	灰N6/	良		が殆ど見られない。
220	包含	瓦器	(14.2)	(4.3)		底部から口縁にかけて内彎して開く。体部横	横ナデ	灰N4/	緻密	1/6	炭素の吸着が不十
	3層	椀				方向に暗文が微かに残る。	ナデ	灰N4/	良		分。
221		瓦器	(15.4)	(3.9)		底部から口縁にかけて内彎して開く。体部横	指頭圧、ナデ	灰N4/	緻密	1/5	
	3層	椀	,			方向に微かに暗文が残る。	ナデ	灰N5/	良		
222		瓦器	(14.4)	(4.1)		底部から口縁にかけて内彎して開く。体部横		灰N5/	緻密	1/4	炭素の吸着が不十
		椀	(17.4)	(4.4)			お頭圧、横)/	灰白5Y7/1	良	"	
	3層			(0.0)	(4.4)	方向に微かに暗文が残る。 				1/0	分。
223		瓦器		(2.6)	(4.4)	底部から内彎して開く。高台の退化が進む。		灰白2.5Y7/1	やや密、細かい長石,微〜細	1/6	炭素の吸着がほとん
	3層	椀				暗文は摩滅のため不明。	ナデ	灰白2.5Y8/1	<b>砂を含む。</b>		ど見られない。
									良。		
224	包含	瓦器	15.1	(3.2)	4.2	しっかりした輪高台を貼付する。見込みに方	指頭圧、ナデ	灰N5/	密、微砂を多く含む。	3/4	炭素吸着も良好。和
	3層	椀				向を変えた平行の暗文。口縁部は横方向に	ミガキ	灰N5/	良好		泉型。
		l		1		ヘラミガキ。					

## 遺物観察表11 (225~245)

_	±./L					1	amate / El	fr der ( fil)	Inc. 1	Lab.	, m, 14
No.	出土	器植	法量(	_		形態・施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土		備考
_	箇所			器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
225	包含	瓦質	(15.6)	(4.4)		口縁は内彎、内傾し端部を軽く面取り。外面	ナデ	暗灰N3/	緻密。雲母、長石を含む。	1/12	河内系
	3層	羽釜				に鍔を貼付する。	ナデ	暗灰N3/	良		
226	包含	瓦質	(20.5)	(3.4)		口縁は内彎、内傾し端部を軽く面取り。外面	ナデ	灰白N8/	やや密、細かい長石,微〜細	1/16	
	3層	羽釜				に鍔を貼付する。	ナデ	灰N4/	砂を含む。		
									良		
227	包含	青白磁				明緑灰色の生地に白色の浮文が浮き出る、		断面:灰白N8/	緻密	細片	
	3層	m				皿の見込み部と思われる。		釉:明緑灰5GY7/1	良		
228	包含	白磁		(1.5)		口縁端部をを軽く外方につまみ出す。		断面:灰白N8/	緻密	細片	
	3層	碗				·		釉:灰白10Y8/1	良		
229	包含	白磁	(15.6)	(2.2)		玉縁状の口縁を持つ。		断面:灰白N8/	緻密	1/10	
	3層	碗						釉:灰白2.5GY8/1	良		
230	包含	青磁		(3.0)		口縁端部が大きく外反する。外面に鎬蓮弁文		灰白N8/	密、微砂を含む。	細片	龍泉窯系
	3層	碗						  釉:オリーブ灰2.5GY6/1	良好		
231	包含	青磁		(1.5)		外面に鎬蓮弁文		断面:灰白7.5Y7/1	緻密	細片	龍泉窯系
	3層	碗						釉:オリーブ灰2.5GY6/1	良		
232	包含	青磁			(6.0)	幅の広い輪高台を削り出す。見込みに篦描き		断面:灰白N8/	緻密	1/6	龍泉窯系
	3層	碗			,	文を施す。高台外面は施釉。畳付無釉。		釉:オリーブ灰2.5GY6/1	良	~ ~	in and a second
223	包含	青磁		(2.8)	5.4	削りだし高台。高台外面は施釉。畳付け無		断面:灰白N8/	緻密	1 / 9	龍泉窯系
200	3層	碗		(2.0)	0.1	和。見込みに櫛描き文。体部との境界に界		釉:オリーブ灰5Y6/1	良		能水無水
	3/E	198						Ma. A 9 - 7 / X 510/1	R		
004	7.4	ate rat	14.0	(0.5)		線。 サービスは本名で		Mer T Take /	(m), etc.	. (10	wie du zen -et
234	包含		14.3	(3.5)		外面に鎬蓮弁文		断面:灰N5/	緻密	1/10	龍泉窯系
	3層	碗						釉:オリーブ灰10Y6/2	良		
235	包含	青磁		(3.1)		外面に鎬蓮弁文		断面:灰N8/	緻密	1/10	龍泉窯系
	3層	碗						釉:明緑灰7.5GY7/1	良		
236		須恵器		(3.3)		小さい立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上 		灰白N/7	密。細砂を含む。	細片	
		坏身				げる。短い受け部は上外方に開く。	横ナデ	紫灰5RP5/1	良好		
237	試掘1	須恵器		(6.9)		頸部で大きく屈曲し、口縁端部は丸く仕上げ	横ナデ	灰白N7/	密。細砂を含む。	細片	
	TP-1	甕				る。屈曲部内面に、粘土を厚く重ねて補強。	横ナデ	灰N6/	良好		
238	試掘1	須恵器		(1.7)	9.8	内傾する輪高台を貼付する。	ヘラ削り、ナデ	灰N6/	密。中〜細砂を含む。	底部	底部ヘラ切り未調整
	TP-1	坏身					回転ナデ	灰白N7/	良好	完形	
239	試掘1	土師器	(8.1)	1.1	(6.4)	底部からやや内彎して開く。口縁端部は薄く	ナデ	灰白10YR8/2	やや密、中〜細砂を含む。	1/3	底部糸切り
	TP-3	小皿				仕上げる。	ナデ	5YR7/6	やや不良		
240	試掘1	土師器	(9.2)	1.5	(6.4)	底部から、やや長めの口縁が直線的に上外		橙2.5YR6/6	やや密。細砂を含む。	1/4	底部糸切り
	TP-3	小皿				方に開く。端部は丸く仕上げる。		にぶい赤橙10YR6/4	良		
241	試掘2	弥生	(15.0)	(4.0)		頸部から緩やかに外反し、口縁端部の器肉は	ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	やや粗。長石、チャート、中~	1/8	
	TP-3	壺		-		薄い。頸部外面に多条沈線(残存7条)が巡	ナデ、ハケ	にぶい褐7.5YR6/3	粗砂を多く含む。		
						る。口縁端部両側にキザミを入れる。			良		
242	試掘2	弥生	(9.1)	(4.3)		頸部から緩やかに外反し、口縁端部は玉縁	ナデ、ハケ	にぶい橙7.5YR7/3	やや粗。中〜粗砂を多く含	1/6	
	TP-3	壺				状に丸く仕上げる。頸部外面に多条沈線(残	横ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	t.		
						存4条) が巡る。		,	良		
243	試掘2	弥生	(8.6)	(5.3)		頸部から緩やかに外反し、口縁端部は丸く仕	ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	粗。長石、チャート、粗~中砂	1/16	
	TP-3	壺				上げる。口唇外側に小さなキザミを施す。頸部	ナデ	灰黄2.5YR6/3	を多く含む。		
						外面に多条沈線(残存12条)が巡る。			良		
244	試掘2	弥生	頸部	(4.9)		内傾する肩部から緩やかに立ち上がる。突帯	ナデ	にぶい橙7.5YR7/3	やや粗。チャート、中~粗砂	1/3	,
	TP-3		(8.4)			を貼付し、大きくキザミ目を入れる。突帯の上		にぶい黄橙10YR7/2	を含む。		
	-					(残存2条)下(5条)に多条沈線が巡る。			やや良		
245	試掘2	弥生	(11.8)	(7.9)		野部から肥厚させた口縁が緩やかに外反し、	ナデ	灰N4/	粗。チャート、長石、粗砂を多	1/3	
-10		長頸壺	)	/		端部は横ナデレて薄く仕上げる。外面頸部と		灰N4/	く含む。	-,, 0	
	4	~~				「一般部の境界に浮文を貼付し左右から摘む。		DX1.27	良		
	.					日 秋 部 の 現 介 に 存 又 を 貼 り し 左 石 か ら 摘 む 。 浮 文 下 に 縦 方 向 の へ ラ 描 き 沈 線 を 施 す 。			^		
						IFス I (CMC//I PIV/ 1/1個さん様を肥り。	-				

## 遺物観察表12 (246~264)

_		<b>示攻</b>				<b>-</b> /			1		
No.	出土	器種	法量(	m)		形態・施文	調整(外面)	色調(外面)	胎土	残存	備考
	箇所		口径	器高	底径		(内面)	(内面)	焼成	率	
246	試掘2	弥生	(14.4)	(2.4)		口縁は外傾して開き、端部付近に串状のもの	ナデ、縦ハケ	灰白10YR8/2	やや粗、中〜細砂を多く含	1/16	
	TP-3	壺				で刺突し貫通させる(残存3)。口唇は面取りし	ナデ	灰黄褐10YR6/2	<b>む</b> 。		
						凹線状に凹み、両縁にキザミ目を施す。			良		-
247	試掘2	弥生				横方向に6条の平行沈線を施し、その上下に	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	やや粗、中砂を含む。	細片	
	TP-3	胴部				二重沈線の山形文を施す。	ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	良		
248	試掘2	弥生				外面にヘラ描き二重沈線の円形文(木葉文)	ナデ	明晰褐2.5YR5/6	やや粗、中砂を含む。	細片	
	TP-3	胴部				を施す。	ナデ	黄灰2.5Y4/1	やや良		
249	試掘2	弥生		(13.6)	胴径	緩やかに内彎する。肩部に三列の列点文を	ナデ、横ハケ、	にぶい橙7.5YR6/4	やや粗。粗~中砂を含む。	1/6	
	TP-3	壺			(31.2)	横方向に巡らし、列間には沈線を一条ずつ施	縦ハケ	にぶい橙7.5YR6/4	良		
						  す。胴部最大径付近に、上から円形浮文(貼	ナデ、指頭圧				
						  付)、平行沈線(8条)、円形浮文(貼付)、平					
						行沈線(残存6条)の順に巡らす。					
250	試掘2	弥生	(26.8)	(4.2)			縦ハケ	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗。中〜細砂を含む。	1/16	
			(=010)	(112)		一条の沈線、外側にキザミを施す。	横ハケ	にぶい黄橙10YR6/3	良好	·	
051	試掘2		(23.1)	(2.0)		緩やかに外反して開く。口縁端部に粘土を貼		にぶい黄橙10YR7/4	やや粗。中〜細砂を含む。	1/12	
201			(23.1)	(3.6)		版ペルペープをして開く。ロ豚畑間に相上を畑    付して肥厚させ、内側から串状のもので刺突		にぶい黄橙10YR7/4	良好	1/12	
	TP-2	発					惧ハク	にかい 典位1011/1/4	及好		
						し貫通させる(残存6)。その下に二条の小さ					
						い貼付突帯を巡らす。口唇は面取りして凹線					
						状に凹み、外側にキザミ目を施す。					
252	試掘2	弥生	(18.8)	(2.5)		緩やかに外反して開きく。口唇は面取りして凹	ナデ	褐灰10YR4/1	やや粗。粗~中砂を含む。	1/6	
	TP-3	甕				線状に凹み、外側にキザミ目を施す。	横ハケ	にぶい黄橙10YR7/2	良		
253	試掘2	弥生	頸部	(7.1)		薄手の作りで、口縁で大きく外反する。外面	ナデ、縦ヘラ	黒7.5Y2/1	やや粗、粗~中砂を多く含	1/6	
	TP-3	壺	(13.2)			口縁端部付近に断面三角形の小さな突帯を	ナデ、横ハケ、	黒7.5Y2/1	t.		
						巡らす(残存2条)。	指頭圧		堅		
254	試掘2	弥生		(4.2)	(5.3)	平6な底部から急激に立ち上がり、後に若干	縦ハケ	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗。粗~中砂を含む。	1/6	
	TP-3	底部				外反する。	ナデ	褐灰YR5/1	良好		
255	試掘2	弥生		(3.5)	(6.4)	平らな底部から急激に立ち上がり、後に外反	縦ハケ	淡黄2.5Y8/3	やや粗。粗~中砂を含む。	1/4	
	TP-3	底部				する。	ナデ	淡黄2.5Y8/3	やや良		
256	試掘2	陶器	(41.7)	(12.3)		内外面とも口縁端部に凹線を巡らし、口唇は					
	TP-1	擂鉢				丸く仕上げる。外面に幅広の突帯を貼付す	ナデ	赤10R5/6	やや密。粗~中砂を含む。	1/12	
						る。擂目の単位は11条。	ナデ	赤10R5/6	堅致		
257	試掘2	窯道具	内径	1.1	外径	側面は面取りし、平面型ドーナツ状の円盤形	未調整	黄灰2.5Y6/1	密、中〜細砂を含む。	1/4	上下面とも糸切り
	TP-1	ハマ	(2.8)		(9.6)	である。		黄灰2.5Y6/1	堅。		須恵質
258	試掘2	染付		(1.1)	(8.9)	断面三角形の輪高台を削り出す。高台内側		断面:灰白N8/	密。	1/6	
	TP-1	m				及び畳付け蛇の目釉ハギ。畳付中央部は凹			堅		
						み、施文する。					
259	試揮2	土師器		(2.7)	4.6	平らな底部から内彎して立ち上がる。型成形	回転ヘラケズリ	黒褐10YR3/1	密。粗砂を若干含む。	1/2	外面にスス付着
200		椀(鉢)		(2.1)	1.0	の後ロクロ。外面に鉄分吸着。	回転ナデ	灰白10YR8/2	やや不良、軟。	1, 5	71 111 - 1 1 1 1 1
960	試掘2		(20.0)	(E 0)		内外面とも口縁端部に凹線わ巡らし、口唇は		にぶい赤褐5YR4/4	やや密。微〜細砂を含む。	1/10	
200			(32.8)	(5.9)						1/10	
	TP-2	抽跡				丸く仕上げる。外面に断面三角形の突帯を巡	7 7	にぶい赤褐5YR4/4	堅致		
				4>	-	らす。擂目の単位は14条。	ments and a second	1- No. 1864 - 1874	de de de la completa de la	. (10	
261		土師器	(14.2)	(4.8)		内彎して立ち上がり、口縁は直線的に細く仕			やや密。微〜細砂を含む。	1/10	
	TP-2					上げる。		にぶい橙7.5YR7/4	不良、軟	-	
262		土師器		(5.4)	(13.3)	脚部は短く、つけ根部分から大きく外反し、端		橙5YR7/6	やや粗。中〜細砂を含む。	1/3	
	TP-2	高坏				部で指押さえし、若干上方に反る。 内面脚部	横ナデ、ヘラ 	橙5YR7/6	やや良		
						と底部との境界に稜を持つ。					
263	試掘2	土師器	(15.5)	(3.4)		口縁は外傾し、端部で若干外反する。	回転ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	やや密。微砂を少量含む。	1/4	
	TP-2	坏					回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	やや不良		
264	試掘2	須恵器	肩径	(4.4)		胴部は外傾し、肩部で内側に屈曲する。肩部	回転ナデ	灰N6/	密。	1/8	
	TP-4	壺	(22.3)			外面に断面台形の突帯を貼付し、指押さえ。	回転ナデ	灰N6/	堅		

# 第3章 まとめ

今回の調査での出土遺物は、中世前期の12世紀から14世紀の範囲に収まるものが大半を占め、遺跡の存続時期もほぼその範囲であり、中心時期は13世紀代と考えられるが、試掘調査を含めると弥生時代前期から近世までの遺物が一定量出土している。そのため、ここでは大まかな時代別に概観していきたい。

## 第1節 弥生時代

今回の調査において出土した弥生土器 (241~255) は、その全てが試掘調査 2 のT P - 2 及び T P - 3 の水成堆積層からであり、本調査対象地からの出土は一点もなかった。器面の多条沈線帯が へう描きの個体と櫛描きの個体と両方が見られることから、概ね前期末~中期初頭にかけての遺物 と見られるが、T P - 3 出土の 2 点については中期中葉もしくは後葉に下がる可能性がある。

これらの弥生土器は全て流れ込みによる。当遺跡付近における河川(鏡川)の上流方向は北東〜北方向と見られる。この方向に存在する当該期の遺跡としては、柳田遺跡と鴨部遺跡が想定される。249の壺胴部のような比較的大きめの破片も含まれることから、この両者のうち、より位置が近い鴨部遺跡(直線距離500m強)からのものである可能性がより高い。それ以外にも未知の遺跡が存在する可能性もあるが、現在までの知見に基づく限りはこれ以上のことはいえない。

# 第2節 古墳時代から古代

この時期の遺物のうちで、土師器は試掘調査2で出土した古墳時代の鉢(261)と高坏(262)の2点のみであり、いずれも流れ込みと考えられる。他の遺物は全て7~9世紀代の須恵器で、試掘調査での流れ込みと見られるものもあるが、本調査における包含層や遺構出土のものが一定量存在する。今回の対象地においては確実に古代の遺構と断定できるものはなかったが、今回の対象地からあまり遠くない場所に古代の遺跡が存在している可能性は高いと思われる。

# 第3節 中世

#### (1)遺物

出土遺物が圧倒的に多く、今時調査の中心となる時期である。量的には中世土師器が最も多く、 土師器に比べると量的には少ないものの、貿易陶磁、瓦器・瓦質土器、中世須恵器等の広域流通品 も出土している。ここでは、まず広域流通品について概観してから、土師器について述べていきた い。

#### -貿易陶磁-

今回出土したものを可能な限り分類した結果は以下の通りである。

白磁碗(Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅸ類)、皿(Ⅸ類)、四耳壺(Ⅲ-2類)

青白磁皿、龍泉窯系青磁碗(I-2類、I-3類、I-5類)、小碗

同安窯系青磁碗、皿

以上、中世前期の12世紀~14世紀代に位置づけられる遺物でしめられているが、その内でも13世紀代の陶磁器の割合が若干高い。青花など中世後期の貿易陶磁は見られなかった。

## - 瓦器・瓦質土器-

今回出土した瓦器椀には、在地産の可能性のある炭素の吸着が不充分な遺物も少なからず見受けられるが、基本的には和泉型及びその模倣品であると考えられる。224など12世紀代後半の搬入品と見られる遺物も見られるが、大半は13世紀代の遺物である。

瓦質羽釜(三足釜)については、胎土から見て明らかに搬入品と見られる164、225等は13世紀に位置づけられようが、焼成・調整等在地産と見られるものもあり、それらについては14世紀に下がる可能性もある。

#### - 陶器・中世須恵器 -

今回の出土品には備前焼の製品が全く見られない。中世後期の遺跡から出土する広域流通品では 一定量を占めるはずの備前焼製品が見られないということは、貿易陶磁の出土傾向と同様に、当遺 跡の存続期間の下限を考える上で、消極的ではあるが一つの根拠となろう。

東播系(片口)鉢については口縁部の残存する130、214は何れも12世紀末~13世紀初頭に位置づけられる。また、口縁部ほど確実な根拠とは言い難いが、底部のみが残存する個体についても、立ち上がり部内面の形態からみて、12~13世紀代の遺物と見られる。

#### - 十師器 -

これまでに見てきた広域流通品から考えると、当遺跡の存続期間は12~14世紀と見られ、土師器についてもほぼ同時期の遺物が主体であると考えられる。今回出土した小皿及び坏のうち、底径、器高、底径の全てを計測可能な個体(復元口径・底径を含む)は小皿89点(小坏を含む)、坏49点である。

底部の切り離しについては、坏・小皿の別なく、観察可能な遺物の全てが糸切りであり、ヘラ切りのものは全く見られない。また、底部の形態については円盤状高台(平高台)を持つものが散見される。小皿形態については、立ち上がりが垂直に近いという点のみであり、高台という呼称が必ず

しも適切ではないかもしれないが、坏形態については、平らな底部とは別に高台を明らかに作り込んでいるものも見受けられる。27、96、199等がそれで、9、65、109、197、198も前者ほどではないが、高台を意識して形成しているものといえよう。これらの個体は体部下部に丸みをもち、概ね池澤分類の坏K類 [池澤、2004-2] にあたる。見込み部の渦巻状成形痕をナデ消さずに残すものが多く、ナデ消した個体においても、完全に消えずに残っていることから、前代の円盤状高台椀との間に直接の系譜的つながりはないものと考える。

次に、先の項で少し触れた内面見込みに残る渦巻状成形痕であるが、小皿形態については89点のうち成形痕の残るものが13点存在する。坏形態については成形痕の残るもの23点、及びナデ消しが弱いため少し残るもの2点が存在し、ほぼ半数を占める。小皿形態において成形痕の残存する個体が量的に少ない理由としては、径が小さく、成型が雑になりにくいため成形痕自体が残りにくいという側面と、成形後のナデ消しが容易であるという側面との二つが考えられる。

このような成形痕については、熊本県内の出土例についての論考がある [美濃口、1994]。そこでは、見込み部の調整を以下の四つに分類している。

- ・a類 軽くナデるもの。成形が丁寧で元々渦巻状成形痕が殆ど生じていない段階。
- ・b類 中心部の狭い範囲を強くナデるもの。渦巻状成形痕が周辺部に残る。
- ・c類 見込み全体を一定方向に何度も強くナデるもの。渦巻状成形痕は生じているものの消されていると考えられる。
- ・ d 類 未調整のもの。渦巻状成形痕がはっきり残る。

上の熊本県例では、12世紀後半までは全て a 類で占められるが、12世紀末に大きな画期が見られ、 c 類主体に変化する。そして、13世紀初頭に b 類、13世紀前半から中葉に d 類が出現し。13世紀末 ~14世紀前半に至って、坏では d 類が主体、小皿においても d 類が増加し、a 類と半々程度になる。

本遺跡の出土遺物に上の熊本県例をそのまま当てはめることは勿論できないが、細かい年代を別にして考えるならば、大まかな傾向は似通っていることが推察できる。本遺跡の出土遺物については比較的摩耗しており、見込みのナデ調整を細かく観察できていないが、渦巻状成形痕が残存している個体と、残存していない個体との間の移り変わりについて、以下のような大まかな傾向を想定することは許されそうである。

・坏 渦巻状成形痕のあるものとないものとがほぼ半々であり。本遺跡の存続時期を12~14世紀とするならば、その中間の時代の13世紀代に画期があるものと考えられ、それを境にして前半と後半に分けられよう。勿論、遺跡の存続期間の各時期を通じて、遺物が常に一定の割合で出土するということは、あり得ないが、少なくとも12世紀以前や14世紀以降に画期がくるほどの大きな偏りは生じないとみてよかろう。ただし、このような変化は漸次的なものであると考えられ、ある時期には成形痕のある個体とない個体とが併存していたと考えられる。

・小皿 坏に比べて、渦巻状成形痕が残る個体の割合が少なく、この点において坏と異なっているが、少なくとも残存している個体については、後半の時期に属する可能性が高い。

土師器小皿・坏集計表(単位はcm	十師器小皿	• 坏隼計表	(単位はcm
------------------	-------	--------	--------

		渦巻状成形痕のない個体		成形痕の残る個体		全 体				
		個体数	中間値	算術平均	個体数	中間値	算術平均	個体数	中間値	算術平均
小皿	口径		7.60	7.53		7.60	7.57		7.60	7.53
	器高	76	1.40	1.42	13	1.40	1.44	89	1.40	1.43
	底径		5.50	5.49		5.10	5.22		5.50	5.45
坏	口径		13.15	13.00		13.80	13.87		13.70	13.44
	器高	24	3.80	3.82	25	3.80	3.85	49	3.80	3.83
	底径	1	7.05	7.12		7.90	7.79		7.60	7.46
全体		100			38			138		

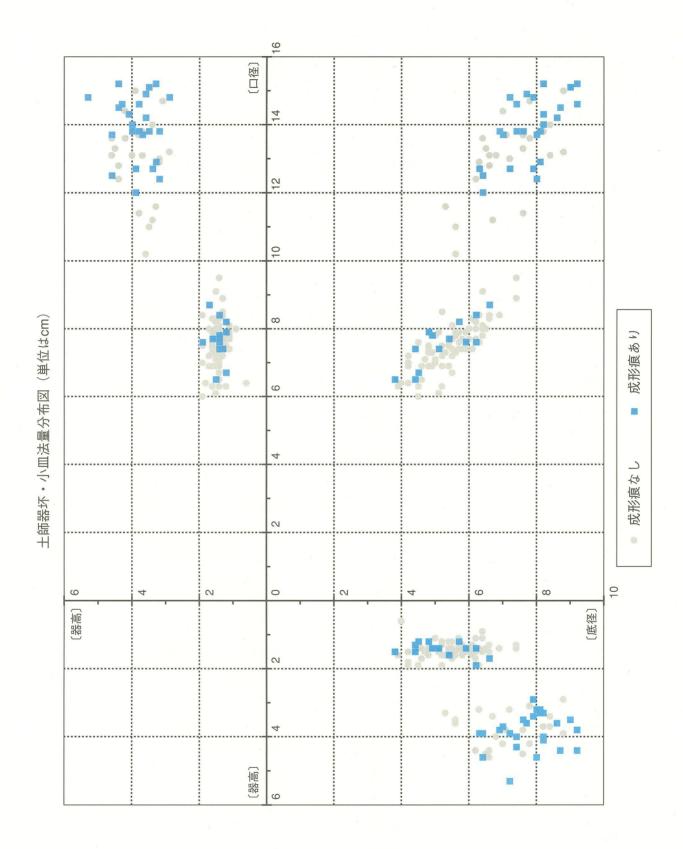
上に示した表は土師器小皿、坏の法量の集計表である。異常値の影響を少なくするため中間値を 使用したが、念のため通常の算術平均も表示している。また、ナデ消しの痕跡を観察できる2個体 については、便宜上ここでは成形痕の残る個体の方に分類した。また、小皿には観察表において小 坏と記載した2個体も含めて集計した。

法量を比較してみると、まず、小皿形態においては、渦巻状成形痕の残る個体群と、残らない個体群との間で差のみられるのは底径のみであり、成形痕の残る個体群の方が0.4cm小さい(残らない個体群の93%の大きさ)。この結果だけで見ると、成形痕の残る個体は口縁の開きがやや大きいとも考えられる。しかしながら一方で、次ページの法量分布表を見る限りでは、分布域に殆ど差は見られないため、このような結論に結びつけるのはやや乱暴であると考える。従って、小皿に関しては、渦巻状成形痕の有無と法量との間に意味のある相関関係は認められないという結論になる。これは、時代が下っても両者が併存して存在し、完全には切り替わらないためであると見られ、成形痕の残る個体が優勢になることは、少なくとも本遺跡の存続期間中には最後までなかったものと見てよかろう。

坏形態においては、低い円盤状高台を持つ坏Kの殆どに渦巻状の成形痕が残存しているため、集計ではその影響が若干出ている。高台のある分、集計では器高が高めに、底径が小さめになっているが、念のためそれらの個体を除いて集計しても、その変化の幅は0.1cm前後であり、結論に大きく影響を与えるものではなかった。

成形痕の残存する個体群と、そうでない個体群との法量を比較すると以下のような傾向が指摘できる。次ページに示した法量分布表においても、重なり合っている部分が存在するとはいえ、小皿 形態の場合とは異なり、両者の分布域には明らかな偏りが存在している。このことから考えても、 渦巻状成形痕の有無と法量との間には、ある程度の相関関係が存在するとみてよかろう。

- ・口径・・・成形痕の残る個体群の方が0.65cm大きい(残らない個体群の105%の大きさ)。
- ・器高には殆ど差が見られない。



・底径・・・成形痕の残る個体群の方が0.85cm大きい(残らない個体群の112%の大きさ)。

上記のような点から、坏形態においては、渦巻状成形痕の残る個体の特徴は、そうでない個体と 比較してより扁平なプロポーションを持ち、体部から口縁部にかけての外傾が若干小さい傾向にあ ると考えられる。以上、本遺跡出土の土師器について、ここまで述べてきたことの結論は以下の3 点である。

- 1. 見込み部の渦巻状成形痕については、その有無が時期差を反映し、それは坏形態においてより 顕著であること。
- 2. 坏形態においては渦巻状成形痕の有無と法量との間にある程度の相関関係が存在すること。
- 3. 上の2点を総合して、坏形態においては、前半期から後半期にかけて器高の変化を伴わずに、 口径・底径ともに増大し、より扁平になる傾向が見られること。

上記の3点の結論が、本遺跡と存続期間の重なるほかの遺跡においてもみられる普遍的な傾向であるかどうかということについては、時間的な制約もあり確実な結論を出すことができなかった。

#### (2)遺構

今回の調査においては、多くの遺構を検出したが、ピットや建物跡に関しては遺物量も少ないものが多く、特に建物跡の錯綜している部分で検出したSB5~SB8については図化できる遺物が存在しなかった。従って、全ての遺構についての時期区分は困難であり、ここでは比較的時期の判別しやすい遺構を中心に述べていきたい。また、出土遺物は概ね12~14世紀の間に分類できるが、検出遺構では確実に12世紀以前と判断できる遺構は存在しなかった。

井戸跡SE1は、SD2、SD3を壊して築成されており、今回の検出遺構では最も新しい時期に属すると考えられる。また、出土小皿の口径も小さく、14世紀中葉もしくはそれ以降の遺構であると考えられる。

各建物跡については、重なって検出されたものが多いため、本来は数時期に細分されようが、出土遺物も少なく、細かい時期区分は困難である。その内で遺物の出土した遺構に関しては、建物の中軸線方向が磁北に近い SB1、 SB4、 SB11(及び SB10)については、遺跡の存続期間の後半にあたる13世紀後半から14世紀頃の遺構、やや東偏する SB6、 SB9 についてはそれに若干先行する遺構であるとみられる。また、 SB2、 SB3 については、出土遺物のみで考える限り他の遺構と大きい時期的な差は考えられないが、他の遺構とは中軸線方向が大きく異なるため、共存していたとは考えにくい側面がある。出土遺物から見て他より先行するとは考えられないため、本遺跡の存続期間では終末期に当たる SE1 と同時期の遺構としてひとまず考えるべきであろう。

柵列については、軸線方向及び直行軸方向がほぼ同一のSA1, SA3については13世紀代の遺構と見られる。SA2については出土遺物も殆どないため確かなことは言い難い。

土坑・ピットのうち、遺物が比較的多く出土した遺構に関しては S K 3 、 S K 4 、 P 6 、 P 2 3 が13世紀代の遺構、 P 3 、 P 29については13世紀後半~14世紀の遺構として位置づけられよう。

溝跡については、ほぼ13世紀代 $\sim 14$ 世紀初めに位置づけられようが、その中では中軸線がほぼ磁北方向のSD3がやや遅い時期であると思われる。SD4については出土遺物が認められなかったため確実なことは言い難いが、中軸線方向からみるとSD3と関連する可能性がある。SD1及びSD2についてはSD1の方が若干先行する可能性があるが、断定はしがたい。

## 第4節 近世以降

この時期の遺物は、本調査対象地で2点、試掘調査2の対象地を含めても10点以下であり、量としてはあまり多くないため、今時対象地のこの時期における人間の居住については否定的な結果といわざるを得ない。中世段階に存在した集落は場所を移し、耕作地として利用されるようになったと考えられる。

S B 10から近世遺物が 1 点出土しており、そのまま考えると近世の遺構とすべきだが、後世の混入であるとみられるため、中世の項で扱った。

## 第5節 終わりに

最後に本遺跡の性格について述べておきたい。ほかの時代の遺物も出土しているとはいえ、遺物の出土傾向から考えて、中世前期の鏡川下流域の拠点的遺跡としてとらえるべきであろう。ただし、検出された遺構にはあまり大規模なものが見られないため、中心的な居館等の建物は付近に存在していたものと考えられる。また、この時期の神田地区については史料的な制約もあり遺跡を形成した主体についての具体像はつかみにくい。そのため、現時点で考えられる観点について以下のような若干の点を指摘するにとどめておく。

- ・遺構の存続時期がほぼ鎌倉時代に限定されることから、鎌倉幕府と結びついた在地勢力との関連性。
- ・古代の須恵器の出土も見られることから、古代からの荘園との関連性。これについては平安時代 後半から院政期に位置づけられる遺物が殆ど見られないことが、否定的な材料になろう。
- ・南側の鷲尾山系を越えて、現在の春野町方面に至る峠道の北麓という交通の要所。交通の面については河川交通も考えに入れる必要があろうが、当時の鏡川(及び神田川)河道の様相については想像の域を出ないため確かなことはいえない。

現在のところ、可能な推論については上記のようなものであり、それ以上の推論については今後の史料の増加を待ちたい。なお、現地付近は急速に都市化が進み、中近世的景観の残滓は急速に失われている。機会を逃さず積極的な資料の収集が望まれる。

最後になるが、現地調査から調査報告書の発行までに10年弱の時日が経過してしまったことについて、お詫びを申し上げ、結びとしたい。

#### ・参考文献

橋本久和『中世土器研究序論』(真陽社、1992)

松田直則・廣田佳久・前田光雄『具同中山遺跡群 第1分冊』高知県埋蔵文化財センター発掘調 査報告書第1集 (1992)

美濃口雅朗『熊本県に於ける中世前期の土師器について』中世土器の基礎研究 X、(日本中世土 器研究会、1994)

森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会『太宰府陶磁器研究 森田勉氏遺稿集』(1995)

中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』(真陽社、1995)

中村浩『須恵器集成図録第1巻 近畿編1』(雄山閣、1995)

中村浩『須恵器集成図録第6巻 補遺・索引編(雄山閣、1997)

廣田佳久『上美都岐遺跡』佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集(1997)

出原恵三『四国地域の様式編年 5 土佐地域』弥生土器の様式と編年 四国編(木耳社、2000)

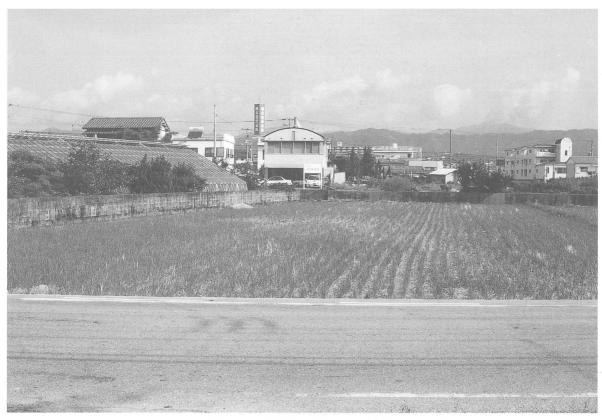
廣田佳久・岩本繁樹『野田遺跡 I 』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集 (2002)

久家隆秀・今田充『千本杉遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第87集 (2004)

池澤俊幸『土佐における広域分布品の様相』中世西日本の流通と交通(高志書院、2004-1)

池澤俊幸『四国における古代後期から中世の土器様相』中近世土器の基礎研究 X T (日本中世土器研究会、2004-2)

# 写 真 図 版



1. 試掘1及び本調査対象地全景(南から)



2. 試掘2調査対象地全景(南から)



3. 溝跡完掘状況 (南から)



4. SE1完掘状況(北から)



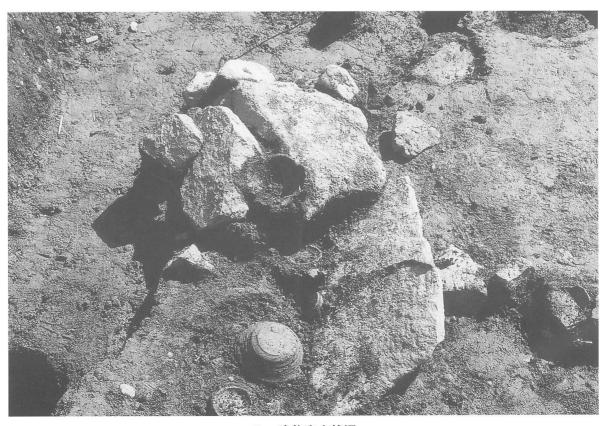
5. 遺物出土状況



6. 遺物出土状況



7. 遺物出土状況



8. 遺物出土状況



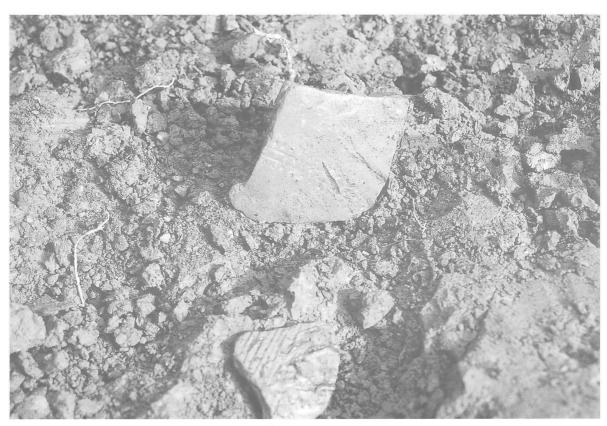
9. 遺物出土状況



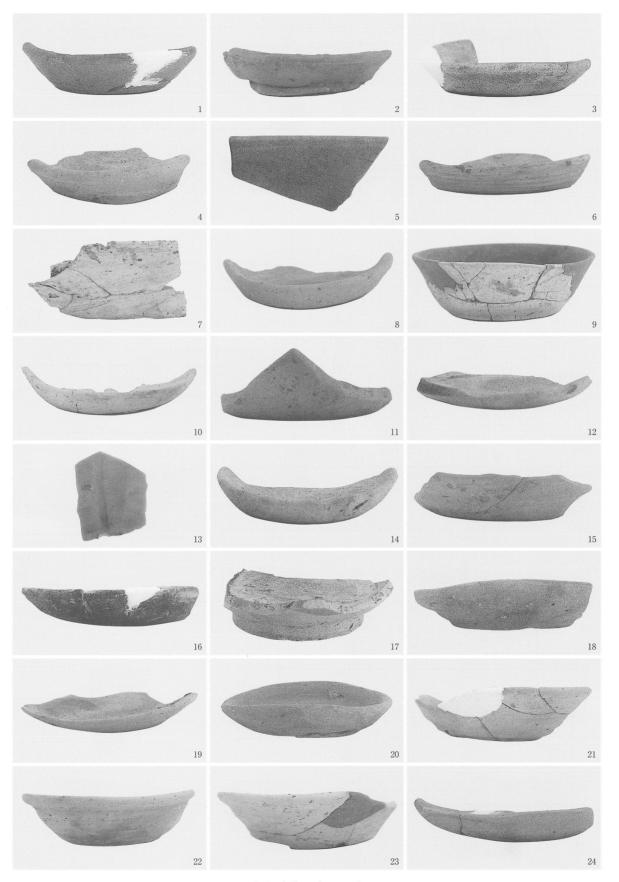
10. 遺物出土状況



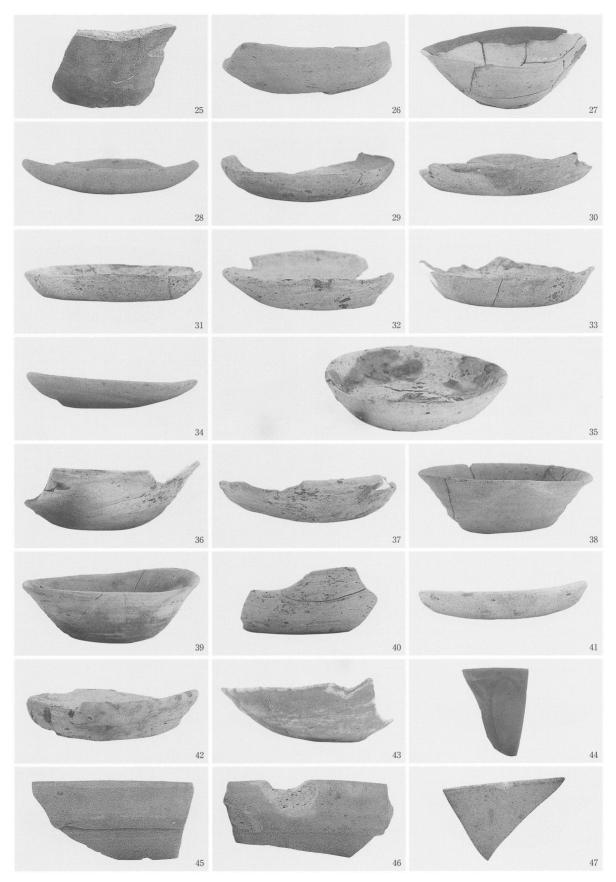
11. 遺物出土状況



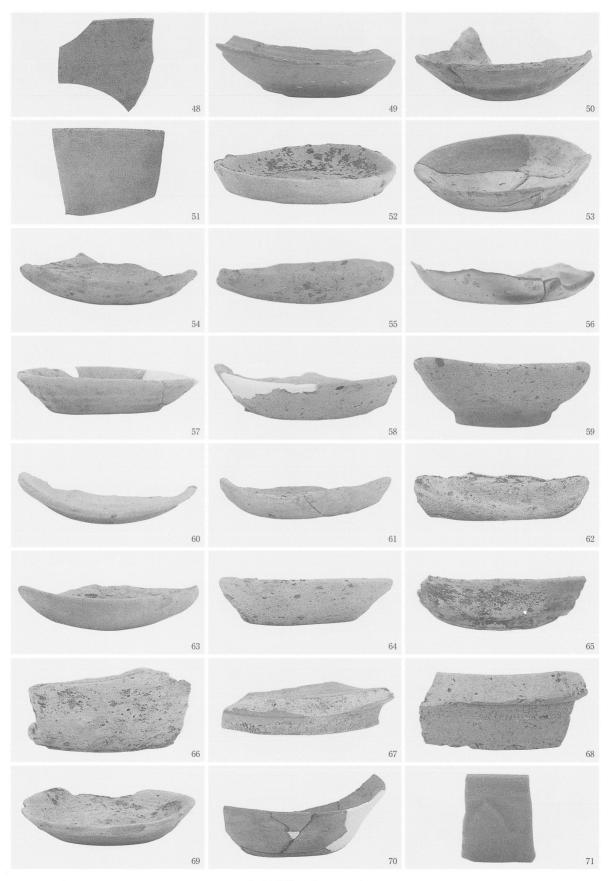
12. 遺物出土状況(試掘2)



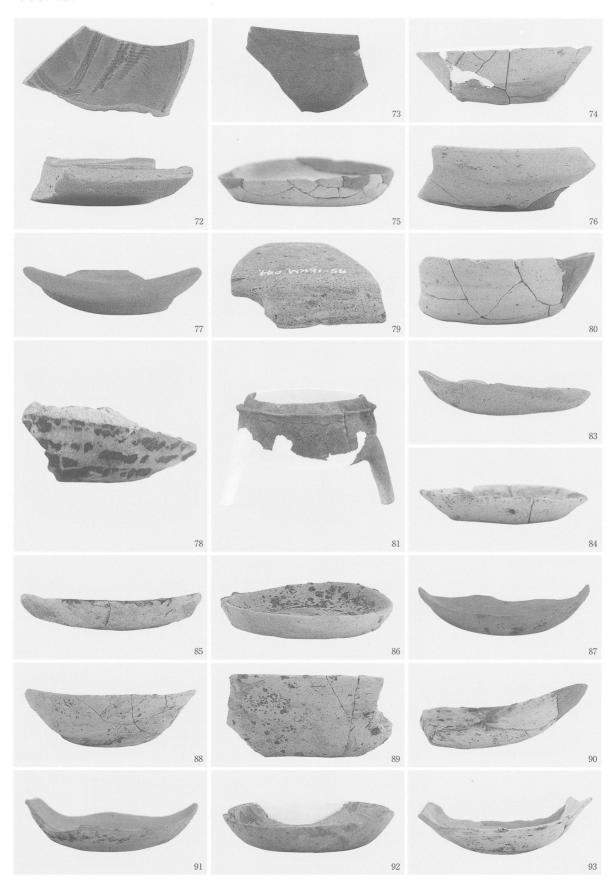
出土遺物 1 (1~24)



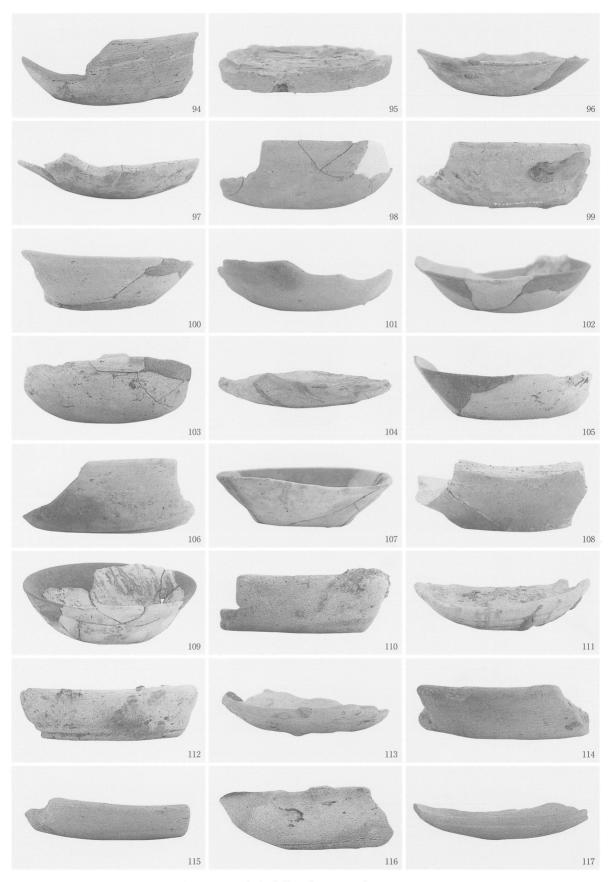
出土遺物 2 (25~47)



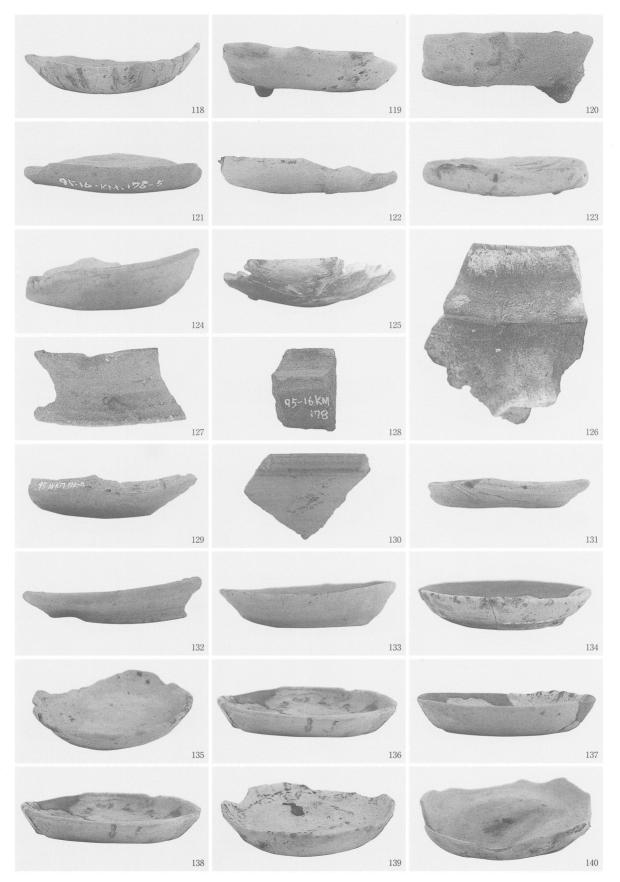
出土遺物 3 (48~71)



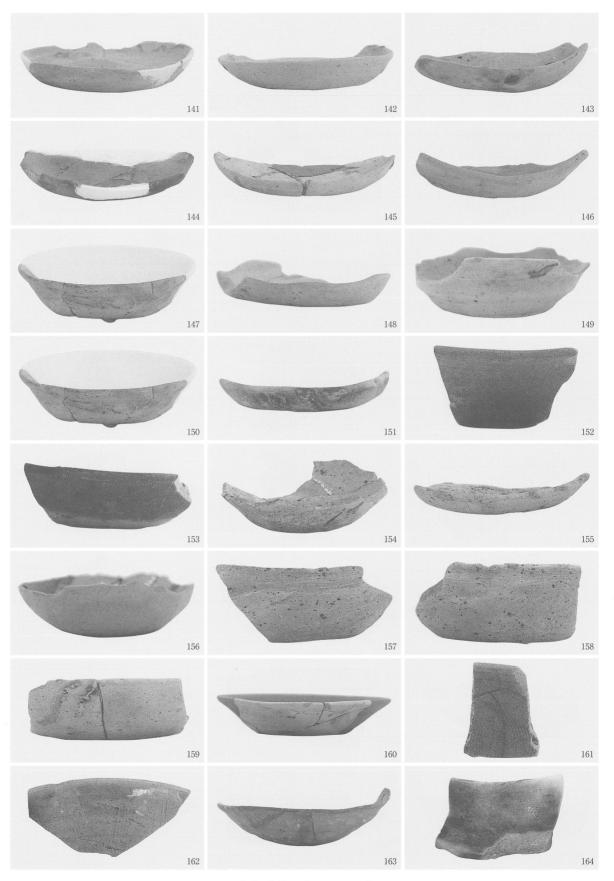
出土遺物 4 (72~93)



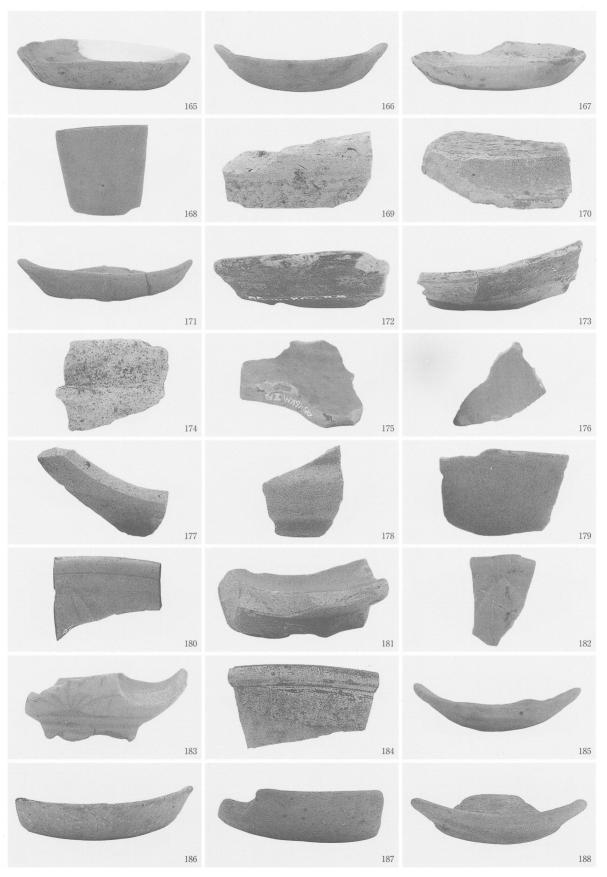
出土遺物 5 (94~117)



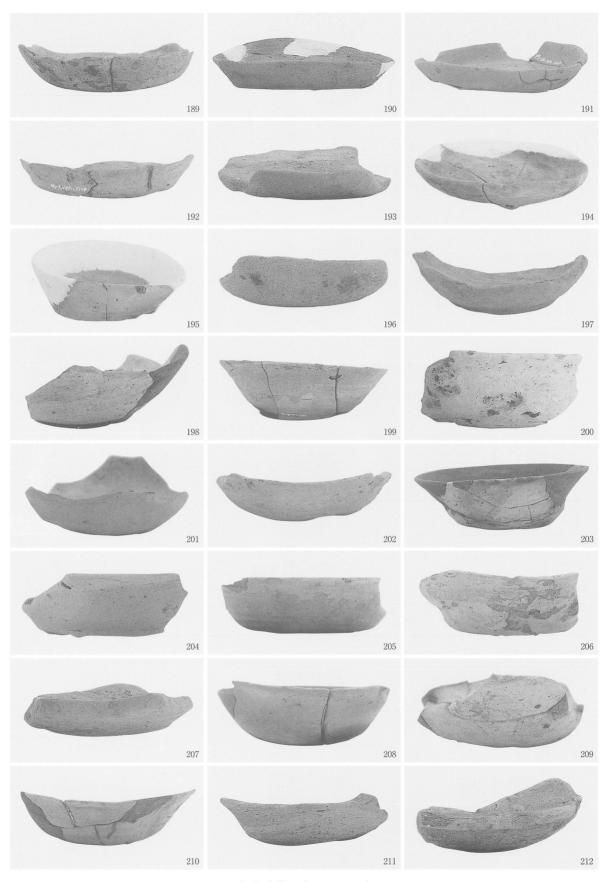
出土遺物 6 (118~140)



出土遺物 7 (141~164)



出土遺物 8 (165~188)



出土遺物 9 (189~212)